

それにしてはカンチ王は、スダルシヤナの埃にまみれた今の容子が、時めく昔の王妃の姿と、あまりに變つてゐるので思はず暗涙にむせぶ。そして

「しかし王妃、あなたはこの道を歩いていらつしやるやうな御身分ではありません。私に車の用意をさせて下さいまし」と云ふ。然しスダルシヤナに取つては、今は此自由清貧の身を限りなく喜んでゐるのである。スダルシヤナは驚いて、

「あゝ、そんなことをおつしやらないで下さい。私は私の王が私をあちらに伴れて行つた道の塵の上を歩いて歸ることが出来なければ決して幸福には感じません。……曾つて私が王妃であつた時には、私は銀や黄金の上を歩きました……けれ共今は塵

や裸の土地を歩いて私の生れの悪運を償うと思ひます。私は今日かうして一步一步歩いてこの地で塵の王に逢はうとは、夢にも思ひませんでした」と答へる。更に侍女スランガマも、カンチ王に向つて「王様、あなたも又今日は塵の中を歩いてゐらつしやるぢやありませんか?……」と、三人とも思ふ存分胸の中を語り合つて尊き信念の幸恵を悦び合ふ。

かうした盡させぬ話に夜は明けて、東方の空には朝の最初の吐息が洩れ初めた。「あの御殿の黄金の塔の輝きわたるのも、もう間もないことであらうと、三人は聲をひそめて一心に東方の大空を見上げる。

こゝへ、かの老哲人がやつて来る。そして彼は此三人の姿を見

出して、みなさん、とうとう夜が明けた！と叫ぶ。王妃はありあまる法悦に瞳を輝かせて、あなたの祝福で私は幸福を與へられました。私はとうとう此處までまゐりましたと、長い間の老人の手引きに感謝する。

老人も悦びにあふれて、併しあなた方は私達の王がどんなに無頓着かと云ふことがお判りになりますか？王様は兵車も送らなければ音楽隊も送らない、立派なこともなければ莊嚴なこともないと云つて、信の光景は、信仰なき普通人の想像とは遙かに異つてゐることを暗示する。けれど王妃はもはやその事は充分に味得してゐる。彼女は云ふ。莊嚴でないのですつて？之れこそ却つて眞の莊嚴ではありませ

せんか。御覽なさい。空は端から端まで眞紅になつてをります。空氣は花の香りを迎へて、空に満ちてをります。……私はあの莊嚴らしい王妃の衣服を永久に捨て、しまつたのです。あの方はすべての人の前で私に召使の衣服を着せて下さいました。その方がどんなに樂か知れませんか！私は今日あの方の召使です。最早や王妃ではありません。併しあなたの敵はあなたを笑うてせう。その嘲笑をあなたはどうして辛抱しますか？嘲笑するものには永久に嘲笑させておくが好い。彼等をして街で私に塵を投げかけさすか好い。その塵は、今日私の王様に逢う前に私自らを飾る紅粉になるのです。

外界のみに生きてゐる人は、始終外界に支配せられて安住の生活を得ない。けれど内に充ちた人は、如何なる外界の冷笑嘲罵をも氣にかけない。のみならず普通人に取つて出来がたいと思はるゝ危険のことも、それ程危険とは思はずにやつてのける。人々の冷笑はむしろ信の色増す光澤となる。逆境の恩寵とはひとり信の人によつてのみ體驗される言葉である。

老哲人はスダルシヤナの言葉や姿の上に、聖者の如き靜かに落付いた尊き信の輝きを見て、感激の涙にくれる。彼女はさながら黎明の空高く聳え立つ雪の峯のやうに崇高であつた。あゝ、もはや何の云ふべき言葉があるう！と老哲人は云ふ。彼女が宮殿を逃れて路傍に立つてゐるからと云つて泣いてはなら

ぬ。彼女が黄金や寶玉や一切の美裝を抛つて、埃にまみれてゐるからとて嘆いてはならぬ。彼女は今や路傍に咲ける一輪の白菊の身にさへすぎないけれど、その美こそは、却つて温室の中に咲きほこる花の光輝に幾百倍の光を輝かせてゐるではないか。その美こそ眞に無飾の中の光輝である。自然法爾の輝きである。今や本願眞實心の光雲は、無碍如虚空である、いかなる障りにもさへらるゝことなしに、一切ありとあらゆるもの、いすがたの上に豊純の光澤をかむらせて、その虚無之身、無極體の顔容は、端麗を極めてたぐふべきものさへない。遠く我が親鸞が、光明月日に勝過して、超日月光となづけたり、釋迦嘆じてなをつきず、無等々を歸命せよと、朗らの聲を放つて歌うたやうに、今我が愛する旅人にも、只歌

ふべきこと、踊るべきことが残されてゐるまでとあつた。老哲人は叫ぶ。  
 「さあ！私共は春祭りの最後の遊戯をして遊ばう！……着物のついた塵などを拂はうなどは思はずに！今日私共は、わが王の宮殿に満ち／＼てゐるあの驚くべき音楽と歌とを聞くやうにどうしてゆるされないてゐられやう！……さうして我等が愛する王妃、侍女、カンチ王、老哲人の四人は歡喜の胸を雄々しくひらく。南の風は春の曠野をかすめて去る。  
 「御覽遊ばせ！太陽が上りました！」  
 と、侍女スランガマが叫ぶ。  
 第二十場

金色に輝く春の大路をたどつて、我等の愛する旅人たちは遂に暗室王の宮殿に達した。  
 場面は暗室である。王妃は暗室王と對座してゐる。  
 「……私はあなたの召使で御座います。私は只あなたに使える特権を探してをります。虚偽虚飾の生涯に別れを告げたスダルシヤナの胸には、只無量の懺愧の涙がこみあげてくる。力に充ちあふれた法悦は靜かにそしてものがなしい。  
 暗室王は眞實のこもつた柔しい聲で、「お前は今私が判るかいと訊く。王妃はしとやかに、「え、え、判ります」と、うなづきながら更に語り出す。

「私があなたを愉快な庭園の私の王妃の室に見出したいと求め  
てゐる間は、あなたのお姿はいつも私を撥ね返しました。そして  
あすこではあなたの一番賤しい召使でもあなたより立派に見え  
ました。——お逢ひしたい——と云ふ私の熱情が永い間私の眼  
をその儘にしておきました。……王様！あなたは決して美し  
いお方では御座いませぬ……あなたはすべてのものと比較す  
ることの出来ない處に立つてゐらつしやいます！」

「私と比較することの出来るものがお前の中にあるよ」  
「もしさやうで御座いますなら、それは又、最早比較にならないも  
のになつてをります。あなたの大愛は私のうちに輝いてゐます。  
その大愛のうちにあなたのお姿が反映つてをります。その私の

中に反映つてゐるあなたのお顔は、あなたにもお判りになりませ  
う。お、王様！それは私では御座いませぬ、それはみんなあな  
たので御座います。あ、！」

眞實至誠の欣求心は、奸詐百端身に充てる「虚假雜毒の彼女の胸  
のなかのものとは思はれない。それはひとへに暗室王の廻向の  
賜物としか思はれない。彼女は暗室王に愛せらるゝ身である。  
その愛は海の如く限りがない。彼女が此大愛を感ずることの出  
來なかつたのは、虚假の雜愛を彼女の胸の瓶に畜へてゐたからで  
ある。彼女はそれを自覺した。そして今は空しき瓶をどつぶり  
と大海の中に投げ入れた。慈悲大愛の海水は捧げられたる此胸  
に残る所もなく入り充ちて、大海の波と共に波打つた。あ、遂ひ

にかたくなの胸の扉は永遠に開かれたのだ。かくて我が暗室王は勇しく今日、私はこの暗室の扉を開かう――競争はこれで終りを告げた！お出で！さあ私と一緒に外にお出で！光明の中に！と、叫ぶ。吾が王妃はかうして人間眞實の相に還つて、波打つ群生海に飛びこむことになつた。さながら親鸞が一つには往相二には還相！と宣言した時のやうに、張りつめた胸のしづけさと、ふるひ立つ欣求の魂を抱へて。行く前に、あの残忍な、怖しい此上もない黒い私の王様の脚下に

頭を下げさせて下さいませ！

と王妃は云ふ。

戯曲「暗室王」は之れて終るのですが、私は此寶玉のやうな尊い戯曲に愚劣極まる書を彫りつけたやうに思はれて、胸中不安に堪へません。今筆を擱くにのぞみ、どうぞ此哀れな胸のさわぎを静める爲めに、タゴール氏の數多い詩の中から私の好きな一つ二つの斷章を歌はせて下さい。

お友達よ！

今私の旅立ちに際して

さらばよ、まさきくあれ！と祈つて下さい

空は夜明けに煌めき  
道はかくはしく横たはつてゐます。  
そこへ何を携へて行くかと訊いて下さるな  
私は何をも携へません  
そしてあこがれの胸一つで旅立ちます。  
私の身を婚禮の花束で飾りませう  
私の着物は旅人の狐色のものでは御座いません  
世にたとへ途中で危険が起りましても思ひ残さず  
私は恐れはいたしません。  
私の航海の終つた頃に  
宵の明星が現はれるてせう

そして、だそがれの曲のもの悲しい韻律が  
王宮の門邊から響きくるで御座いませう。  
あなたさまよ！  
あなたが私に、歌へと仰しやる時の  
私の胸は矜りのおもひで、はりさけるばかりで御座います  
そしてあなたのお顔を見上げる私の瞳には  
涙が浮んでまゐります  
私の生のうちで、擾亂や狂暴のすべての響は  
みんな一つに溶け合つて心よい調和を奏てます――  
そしてこの敬虔のおもひは

海を翔けめぐるよろこびの鳥のやうに  
翼を一ぱいにひろげます。  
私は、あなたが私の歌を心好く思つてゐらつしやることを知  
つてゐます  
私は私の讃歌のうたひ手としてのみ  
あなたの御前に出仕されることを知つてゐます。  
私は私の歌の遙かにひろがる翼の端によつてのみ  
近づくことさへも出来ないあなたの御足に觸れます。  
私は歌のうれしさに酔うては、吾を忘れて  
主なるあなたを友と呼ぶので御座います。

## 牧師ブランドの求道生活

——イブゼンより——

### 第一幕

人生の旅道を求めんとして未だ得られない惨しい人間の旅路  
を思ひ出させるやうな険しい高原を、ブランドは道連れに百姓と  
その百姓の息子とを背後に連れて歩いてゐる。百姓とその息子  
とは傳習から逃れることの出来ない弱い人間の象徴と見るべく、  
更に此傳習者の象徴的人物が、ブランド自身の胸の中にもうごめ  
いてゐる傳習の力とも見るべきである。従つて之れから始まり  
んとする兩者の會話は、先づ此傳習的宗教に満足せんとする弱い



姑息的の心と、此姑息曖昧な傳習を切り離して強く獨自に生きんとする心との争闘を表はしたものと見てよからう。

「あゝい、旅のお方、まア待たつしやい！一體お前様は何處にゐなさるんだ？」と百姓は、ブランドに呼びかける。四邊は濃厚な霧が立ち罩め、その上雨がしぼ／＼降つてゐる爲めに呎尺を辨じない。道には處々に裂目や孔が明いてゐて、その上に雪が覆うてゐる。またその雪の下に小川の流れが喰ひ込んでゐる。若し誤つてその中へても落ちやうものなら生命がない。足の下には底知れない地獄が口をあけて待つてゐる。それは人生の旅路である。けれど眞實に道を求めて、永遠の生に生きんとする熱烈な求道者はこの地獄の道をも怖れてはならぬ。

「どうあつても行く。私は主から大なる使命を負はされてゐるのだ。」

「誰だね、お前さんの主人と云ふのは？してお前さんは何者だね？」

「私の主は神だ、私は僧侶だ。」

ブランドは儼然とした態度で、何がなんでも行かねばならぬと云ふ。百姓はブランドに近寄り、説伏するやうな調子で、此道ばかりはたとへ賢い人でも學者でも力に及ばんことだから、片意地な強突張りな眞似をせず、後へ戻つたらよからうと云ふ。そして神の子は浪の上でも歩くなんぞ云ふことは、口ぢや云つても實地出来るものではないし、それも聖書の中にある昔の人には或は出

来たかも知れないが、今日ではそんなことの出来るものはないと云ふ。ブランドは斯うした世馴れたと云ふ傳習者の言葉は聞かなくともよく知つてゐる。けれど彼は此傳習者の人生觀には満足が出来ない。彼は先づ出来るか出来ないかを自分自身でやつて見なければならぬ。自分の一の經驗は、他人から傳へられる百のものより尊い。自己のスタンプを押さないうちは自分のものではない。自己の經驗を度外視して自己の信念を得ることは出来ない。ブランドは家を捨て、妻子を捨て、まで道を見出さねばならぬ。そして彼は今や自己の全生命を賭してまで見出さねばならぬ。「神の御旨で私達の命を取り給ふのなら——瀧ても、沼ても歓迎する。」

斯くしてブランドは、イヤ彼奴は氣でも狂つたんだらう。」と云ふ傳習者達の嘲笑の聲を身に浴びながらも彼は傳習の世界を背後に残して彼の道を進み出した。

暫くしてブランドは稍々小高い所まで歩いて行つた。暗く立ち置めた霧は段々に去つて、雨もやんだ。東からは太陽が昇つて来た、そして高原はスツカリ見晴らされるやうになつた。

見渡せば旭に照らされた遙かな峠に群集がどよめいてゐる。彼等は旅立つ人を送つてゐるやうだ。太陽は霧を破つて愈々輝いて来る。ブランドは暫くの間、此方へ近づいて来る二人の姿を眺めてゐる。日光が二人の身の周圍にキラ／＼輝いてゐる。ヒトザの花は二人の爪先から咲き擴がり、天は二人の歩く周圍で笑

つてゐるやうだ。彼等は最も幸福なるものの如く、手と手とを取りかはして踊つたり、歌つたり、巫山戯合ひをしたりしてくる。彼等二人は若々しい男女である。彼等は軽い夏の衣裳で、暖く、輝いた顔色をして、晴れ渡つた明るい夏の朝の光りの中に歌ふ。

此二人の愛人は、暗い人生、怖い淵を他所にして戀の美酒に酔ひしれてゐる耽美者の象徴である。ブランドは嚮きに舊習慣に甘じて自己の踏むべき道を疎かにして居つた傳習者から別れなければならなかつたやうに、又此耽美者の群に這入つて歌うたり踊つたりしてゐられない。酔ひは必ず醒める時がある。そこに嚴かな人生が姿をあらはす。そこに自己の眞の棲家がある。何よりも先きに自己の眞實な姿に眼ざめんことを熱求してゐるブ

ランドが、此耽美者の群に這入つて自己を胡魔化してゐられないのは當然である。しかも此耽美的傾向が他にのみあるのではなくて、ブランド自身の胸の中にも動めいてゐるのだ。ブランドは決然として戦はなければならぬ。

ブランドは先づ彼等男女の歌に耳を傾ける。男はエイナー、女はアグネスと呼ぶる。

私の美しい蝶々のアグネスや

今に又汝は捕まへられやうぞ。

私は斯うして網の目を織つてゐる

その網の目が私の顔なのだ。(エイナー)

若しも私が奇麗な、小さい蝶々なら

ヒーザの花を吸ひませう

お前が子供ならじやれて遊ぶが善い

けれども捕へやうとは思ふなよ。(アグネス)

イヤ、私はやさしい手でお前を取上げて

私の胸の中に入れてやる

其處でお前は長い一生遊ぶのぢや

その遊びてお前の心は一番善い戀をする。(エイナー)

斯うした歌をうたひながら、彼等は夢中になつて、一の懸崖ケイに近づき來り、今しもその崖の端にさしかゝらうとする。之れを上から見てゐたブランドは、止まれ！其處には地獄がある！と叫ぶ。君等の足許に氣をつけ給へ！君等は崖端がほの、穴洞あなになつてゐる雪の上に

立つてゐるのだ。

たとへ酔うてゐる者から見たら永遠の歡樂境のやうに見えるかも知れないが、一步高い所から見ると人には、その歡樂の家は生老病死のはかないものの上に建てられた空なる化城である。彼等の足の下には今にも永遠に呑み去らんとしてゐる暗い洞穴が口を開けて待つてゐる。そこには地獄がある。甘い愛の花影には根みや嫉妬の針が隠されてゐる。それに眼ざめなければその愛は眞實の救ひにはならぬ。けれど酔うてゐるものには何物の正體も解らない。彼等は笑ひながらブランドを見上げて。

私等二人には、君のそんな心配は無用だ。私等は日光の射す道

を歩いてゐるんだ、そして道の終つた所で百年経つてゐるのだ。  
 ……まア下りて來給へ、私が神の比類の無い恩恵を云つて聞かせようから。」

エイナーは畫家である。しかも人生の眞實を畫かんとする畫家ではなしに、醜いものをも美しそうな想像によつて美化せんとする古いロマンチストである。彼は南の方の暖い國から繪の具箱を肩にかけて長い旅を續けて來た。そしてその旅のうちでアグネスを得た。彼等は今兩親の家へ行くべく先づ此頂上を越えて、それから西の峽灣の村へ行くのだ。彼等はそこに盛んな結婚祝ひを舉げてから、番の白鳥のやうに、再び手に手を取つて日の照る南の國へ行かんことを夢みてゐる。

ブランドは訊く。

そして其處で何をするつもりです？

「面白い物語にある通りの、夢のやうな愛に燃えた生活をするのだ……」

「左様なら、お二人共！」

ブランドは之れ等の歡樂者に答へようともせず、サッサと自分の行く方へ行かうとする。二人は之れを引きとめやうとする。ブランドは厭々ながら止つて、自分の行く道は、唯もう笑つたり、戀をしたり、遊び戯れたり許りしてゐる所でないかと云ふ。ブランドは更に自分の信ずる所を語り、一般の宗教界を批難する。——彼は先づ自分の態度を明かにして、私は所謂傳道者では無い、私

は教會の牧師のやうに喋舌つてゐる者ではない、基督教徒であるか否かすらも實はあやふやに思つてゐる。だが、私は一個の人間だ、そして、この國の心に喰ひ込んでゐる害虫を見附けてゐるといふ事は確實だ。と云ひ、また、私は何も新らしいものを作らうといふのては無い、永久渝らざる正義の爲めに起つたのだ、私は教會の爲めに叫ぶのではない、教理を辯護するものでもない、かゝるものは朝の間に出来て、夕になれば終が来る、と云つて、彼が道を求める態度は自己一身の解決を求めることにあると告げてゐる。

そして世間の呼んでゐる宗教信仰とは一體どんなものであるか、それはカソリック宗派の者が、人類の救主を胸に抱かれてゐる赤兒に變へて了つたやうに、神を老耄れて夢を見てゐるやうな

ものに描いてゐる。そして世界の果て迄擴がつてゐる神の王國を教會の中に閉ぢ込めて了はうとする。人生と教義との間に大きな海を握つて、自分とは關係のないものにしてゐる。靈魂の祝福される事を願つてゐながら、全力をあげて生きやうとはしない。世間の思つてゐる神はブランドの思つてゐる神と異つてゐる。世間の神が微風ならブランドの神は嵐だ。世間の神が冷淡な所はブランドの神は讎敵のやうだ。世間の神が微温く眠つてゐる處を、ブランドの神は全力をあげて愛する。

ブランドの眼にうつる世間の人達は、萬事が中途半端である。彼等の失敗も成功も、善行も罪惡も大事にも小事にも、すべてが中途半端である。そして一番悲しいことには、世間の人達はこ

の中途半端の爲めに、全體を殺して仕舞ふ。ブランドは云ふ、先づこの國を隅から隅へ遍歴して、人々の魂の底を探して見給へ、彼等には一つも完全な美徳がない、唯、その少し宛しか持つてゐないと云ふことが分つて来る。安息日には少し許り眞面目になる。父祖の習慣通り、少しばかり眞面目だ。宴會の席では少し許り浮かれて来る。これも父祖から傳來の風習なのだ。ブランドは生半可の歡樂主義者に向つても此一切か然らずんば無の哲理を以て向つてゐる。そして歡樂耽美主義者の人生觀の浮薄であることを批難してゐる。「イヤ歡樂は人間の胸を劈く程力のあるものではない、若しそれ程の者だつたら、それも善い！熱情の奴隸になつて了へ、歡樂の奴隸になつて仕舞へ、唯それに一

身を打ち込んで仕舞ふんだ！今日と明日とて變つたり、一年經つたら變つて了ふやうな事では駄目だ、どんなにならうとも一切の心で遣ふことだ、半分だとか、一部だとかで遣つてはならぬ。例へばバツカスと云へば鮮明した像が浮ぶが、泥酔者はそれを眞似損なつたのだ。シレナスは美しい容貌だ、併し、亂酔者はそれをボンチ繪に書いたものに過ぎない。」

此會話の後、ブランドは彼等に別れて北の方へ行く。エイナーの戀人アグネスは、ブランドの話の中に、何か明了に解らないけれど、其處にひそむ或る偉大な力にうたれ、ブランドの去つた後もぼんやりして其姿に氣を奪はれてゐる。アグネスの胸には既に歡樂の夢が醒めかかつて来た。

ブランドは獨り寂しく猶も山道を歩いてゐる。

右手は荒涼たる深き谷となれる峭壁に沿うた阪道、山の後には更に高い斷崖や、雪に被はれた大きな峯々が聳えてゐるのが見える。それはさながらブランドの進み行く求道の險難を思はせる。彼は今やその道の上に現はれて、降りがけの坂の中途で、突出した岩角に立つて、谷底を見下ろした。そこには彼の少年時代を養ふた故郷が遙かに横はつてゐる。

人里離れた山の一角に立つて、遙かに續く人間の棲家を眺める程、靜かたそして寂しいものはない。

しかもブランドの眺めた所は遠き自分の姿を彫り付けてゐる故郷である。久し振りに眺める過去の姿である。

「オ、私は又、昔に返つて来た！」と、彼は叫ぶ。それは暗い雲に掩はれた北海の濱邊である。その船の姿、崩れた小山、樺の列樹、古風な教會堂、あらゆるものが彼の小供の時のことを思ひ出させる。そしてその頃斷へず思ふて居つたことから見ると、現在の彼は宛て異つた人に成つて了つたやうな氣がする。

彼は再び谷底を眺める。何事があるのか解らないけれど、子供や婦人や男子がゾロ／＼戸口と云ふ戸口から出て来る。そして長い行列を作つたり、亂したりして岩や砂山の間から見えつ隠れつする。それは古ぼけた教會堂の方へ行くのだ。——彼は思はず叫ぶ。

「オ、私はお前等を知り過ぎる程知つてゐる！眠つた靈魂よ、懶



けた心よ。お前達の口から出る主の祈りは恐しい力て高い天に達する程の眞實の苦痛を持つてゐない。鳴りひびく人類の叫び聲となつて少しも空に浸み透るものと云つたら、日々の糧かてを與へ給へといふ祈りだけだ！これが此處の人民の戦争の叫び聲なのだ！

彼等は食べて生きてゐる外に何の望みもない。その寂しげな教會堂は息のつまる穴のやうなものだ。その空氣は墓の中に閉ぢ込められてゐる腐つた空氣だ。この死んだ、風のない世界では旗一つ生々飄ることも出来ない。そこに何の宗教があらう。そこに何んの神があらう。ブランドは此死んだ世界、しかも自分の過去の世界に涙を流し、再び行きかけやうとすると、上の方から石

を投げるものがある。よく見ると、十五歳ばかりの少女である。彼女は一羽の鷹を打ち殺そうとしてゐるのだ。彼女はゲルドと稱し、破壊論者、無神論者の象徴として見るべきものである。

ゲルドの教會は氷と雪に掩れた荒れ野である。世間の人達はそれを地獄と云つてゐるけれど、ゲルドに取つては天國である。其處には雪崩ユダレが神々しい歌を唱つてゐる。氷の山から吹く風が説教をする。そこには善もなければ悪もない、寒さもなければ暑さもない。一切を破壊した天地には苦惱がない。

ブランドはゲルドの會話に於いて、ゲルドもやはり教會へ行く人であると思つた。たとへ、それが世界の人達の呼ぶ教會と異つてゐても、やはり人生から遠ざかる點に於て同じ意味の教會であ

る。故にブランドから見ればゲルドの人生観は眞實の人生に解決を與へないことになる。

斯くしてブランドは、始め百姓によつてあらはされた傳習的の人生観と戦ひ、次に若き愛人達によつて示された耽美的の人生観と戦ひ、更に進んで道も掟も無視する破壊主義者のゲルドとも戦はなければならなかつた。「戦へ！怒り狂つてこの三つの同盟軍と戦へ！私は自分の天職を知つた！……此等の悪魔が亡んでこそ、この病める世界は再び健康を回復するのだ。起て我が靈魂よ！武器を取れ、帯びたる劍を抜け、天國の世續者の爲めに闘へ！」ブランドは村の方へ下りて行く。

第一幕は之れで終る。

### 第一幕

ブランドが山を下つて故郷の村落へ來て見ると、群集は長い間の旱魃や洪水の爲めに餓鬼のやうになつて飢えて居つた。市長は今しも此群集に對して少々宛の慈善米を施してゐたが、エイナとアグネスも此處へ通りかゝつたので市長は之等窮民の爲めに多少の慈善を乞ふた。ブランドも亦その群集の中に居つたが、彼は此施しに對して偶像の名でする千萬の惠は、一つも靈魂の救ひにはならぬと云ふ。市長はイヤ、私は説法を伺ひたいのではない、説法は腹の減つた時には石塊同然だからなと答へる。私達讀者は此兩者の問答に對して少なからぬ興味を持つてゐる。

る。なぜならば此問題は慈善を論ずるに當つて常に論議されることであるから。そして又此問題は吾々日常生活に常に現在してゐるものだから。

ブランドの語る所によれば、若し人生といふものが此處に見るやうな價値のない無氣力な日々の苦勞で經つて行くものなら、彼は敢て群集がパンに向つて叫ぶのに反對はしない。そして若し彼の血が、人間の饑渴の苦を慰す事の出来るものなら、溢るる泉のやうに流し出して、あらゆる血管を空にすることも辭せない。然し神は人間を塵埃の中から高く引き上げんとし給ふのだ、苟も呼吸ある國民は、たとへ貧しくとも乏しくとも、その苦惱の中から權威と精力とを發揮する。弱い意志も進退極まれば強くなる、争闘

を經てこそ勝利があるのだ、であるから、苦に逢つて眞の人間となり得ない人間は、救はるゝ價値のない者である。……従つてブランドは今此處で只物質的に恵むのはむしろ罪惡だと云ふのである。

之れを聞いた市長等は、自分達が尊むべき唯一の慈善をやつてゐると思つて自負してゐるのだから、殆かもブランドの言葉が、彼等を批難でもしたやうに思つて怒り出す。群集も激して、殺して了へ、石を打附ける、この人で無し奴を村から追出したへ！と口々に叫ぶ。

此處へ一人の女が狂亂のやうになつて飛んでくる。「おゝ、何處へ行つたら私は助けて貰へるのか！私は食物や金やそんなもの

が少つとも要るのぢやありません、けれど、オ、！恐しい………と彼女はすくみ上がる。彼女の家は此處の峽灣を向へ渡つた所にあるのだが、やはり飢饉の爲めにパンの破片すら持つてゐない。三人の子供は飢え切つてゐる。彼女の乳は乾干る。そして末の赤兒が死かゝつて腕いてゐるので、彼女の良人は其子を殺した。けれど良人は直ぐ、自分の犯した罪の恐しさが分つて来て、後悔のあまり自殺を企てたが、彼はその魂が救はれないので生きても居られず、死んで行かれずに、血みどろになつて腕いてゐる。彼女は今此憐れな良人の魂を救ひたいが爲めに説教してくれる牧師を探しに來たのである。

「さア、來て彼人の魂を救つてやつて下さい、海が荒れても、嵐が酷

くつても。あの人は生きること出来ず、死ぬことも出来ないでゐます！小兒の死骸を抱いて、惡魔の名を呼んで轉がつてゐます！」

エイナーは、そんな罰當り奴に構ふことはないんだ！と云ふ。市長はその男は私の管轄区内のものではないと云ふ。けれどブランドは肅然としてウム、これこそ必要な事だ！と叫んで、群集に向つて、船を卸して向へ渡してくれいと云ふ。

けれど海の荒れ方がひどいので群集の中の誰一人生命を投げ出してまでブランドの爲めに漕いでやろうと云ふものは無かつたが、アグネスだけが最後に決然として一身を捧げた。ブランドは喜び勇んで、此かよわい婦人と共に船に飛び乗り、怒濤の中を漕

ぎ出した。エイナーは「アグネス、母親の事を考へるが善い、兄妹の事を考へるが善い！生命が大事では無いか！」と後から呼びかけるけれど、アグネスはこの船には三人乗つて居るのですと答へる。その一人は無論、神の意である。

群集は此勇士の容にうたれて、熱し切つて小丘から船の行衛を眺めてゐる。群集の中の一人はあの人己達に無くてならぬ眞實の牧師様だろうぜ！と感嘆の聲を放つ。けれど市長の言葉は斯うである。「兎に角、他人の仕事に干渉したり、己むを得ない場合でもないのに出さばつて、生命を臺無しにしようなんて、どうしても常規を逸してゐる。私は自分の義務を充分に果して行くのだ。併し、何時も自分の受持ちだけの事をやつてゐれば善

無限の世界に生きんことを熱望するブランドは此様な有限の世界にのみ生きてゐる人達から見たら常規を逸してゐるにちがひない。彼等の常規は即ち彼等社會の日常の習俗である。そして彼等は此習慣道徳より以上に絶対善に生きやうとは思つてはゐない。

ブランドは斯うして迷妄に安じて救ひを求めやうともしない故郷の岸邊を去つて、生の大海へ乗り出たのである。

ブランドの船は無事に着いた。けれど救はんとしたその人は死んで仕舞つた。生き残つた二人の小供は、打驚いて、眼を睜ひらつたまゝ、言葉もなく、ぢつと見据えて座つてゐる。それは、一つの棲木すみぎ

に二羽の小鳥がくつき合つて止つてゐるやうに、唯、見てゐる、ぢつと見てゐる。何とも解らないまゝに、唯、見つめてばかりゐる。ブランドは此小供を眺めて、さながら亡き父の罪業が子供等の胸の中へても流れ込んでゐるやうに思ふ。そして罪の鍵が次から次へと傳つて行くやうに思ふ。彼は父時代からの私の負債てふ世間の言葉を思ひ出して、誰も解くことの出来ない此底知れぬ暗さに襲はれる。

此處へ數人の村人が押しかけて来て、是非ブランドに彼等の土地の牧師になつてくれと頼む。彼等は云ふ、今まで私等が眞實に歩いて行く道を説教してくれた方はあり餘る程ありました、けれどその人達が只指をさして教へてくれたことを、貴方は實地に行

つて見せて下さつた。」

けれどブランドは承知しない。力の無い人々の爲めには彼は盡すべき義務を持たない。彼はそれよりも偉大な使命を負うてゐる。彼は大世界が耳を開くのを求めてゐる。大なる人生を感動せしめねばならない。山で閉ぢ罩められた處では、人間の聲は力無く消えて了ふ。……… 廣い牧場が周圍から招いてゐる時に誰が洞穴の中に閉ぢ籠つてゐるやうか。よく熟る野が手近にある時に、誰が汗を流して荒れ土を耕さうとするか。ブランドは承知しない。

「ア、お前様は自分で點けた燈火を自分で消してあつひなさつた、そして私等は唯一目それを見た許りだ！」

彼等は斯う云つて空しく歸へらねばならなかつた。ブランドは稍暫く歸へり行く彼等の姿を眺めてゐた。あゝ、彼等は歸つて行く、一人、一人ものうげに、元氣もなく肩を屈め、疲れて引ずるやうな足どりて黙つて歸つて行く。それは恰かも、樂園の門から神に追放されたアダムのやうに歩いてゐる。ブランドは此無氣力な、死んだやうな、無限の夜を見てゐるやうな人達の姿をつくつく眺めて、人類は今や罪の像となり果てた！と叫び、深く自分の天職の尊さを感じず。彼の天職とは何ぞ、そは人類を改造することである。一行け！彼方の廣い戰場へ！茲には奮闘すべき餘地がないと云つて彼は行きかける。そして、ふとアグネスが磯邊にゐるのを見て立ち止まり、今度はアグネスの姿をしみじみ眺める。アグネス

の尊さよ！その姿には、たとへ可弱い婦人の身であれ、眞實に旅立つものの尊い勇しさが溢れてゐる。彼女は遠くの空の音楽でも聽いてゐるやうに海濱に耳を傾けてゐる。その静けさは力に充ちたもののにのみ味はれる尊い静寂である。所謂張りつめた静寂である。彼女の胸には今無限が聲をひそめて歌うてゐる。ブランドは靜に彼女に近寄り、嬢さん、貴方の眼のさまようてゐるのは、この輝いてゐる海濱の上なのか？と訊く。アグネスは振り向きもせず答へる。海濱でも、陸でもありません、然ういふものは私には見えなくなりました、唯、一層大きな世界が空の上にかつきりと浮上つて輝いてゐるのが見えるだけであります。

彼女は、彼女の魂に新らしい力が醒めて来るのを感じてゐる、黎明の來るのが見える、泉の湧き上るのが解る。そして彼女の心は世界をもその中に抱き込むやうに、大きく、廣々としたものになつた。それはかの戀人エイナーと共に楽しんだ歡樂の世界とは遙かに異つてゐる。あれは人工的の一時の快樂に過ぎなかつた。浮薄な白粉を塗つたやうな美に過ぎなかつた。それは魔藥に酔はされたやうな陶醉に過ぎなかつた。けれど今彼女の前にあらはれかかつてゐる世界は、すべてのものが各々眞實の姿を以て輝いてくる世界である。そこには彼女の心を嚴肅に引きしめる偉大な力がひそんでゐる。そして此處こそ汝の住むべき新らしい世界ぞ！と云ふやうな聲がする。そこには人々が

口にすべきあらゆる思想、人々が爲さねばならぬあらゆる行爲が、今、産れ出づる間際に迫つたやうに、動いたり、慄へたり、聲を出したりしてゐる。彼女には神を見ると云ふよりも、神を感じてゐる。その神は救はずにやまぬ悲哀と愛とに燃えて、一切の群生界を見下してゐられるやうに思はれる。そしてその神は、汝は造らるべきものにして今造られたり、汝は永久に失ふか、得るか、何れかを選べ！汝の天職を盡せ！汝の苦痛を忍べ！——さらば汝はこの新しい世界に人を造るだらう！と叫んでゐるやうに思はれる。アグネスにもブランドにも、神が新らしく自身の内に生れかかつて來た。彼等はそこに尊い世界を眺めるやうになつた。彼等は、此内に擴がる世界に於て自己を完全に充實させねばならぬこ



とを知つた。

ブランドは夜の落ちかかる谷間の方を眺め、「サア、來れ、人々よ！」と叫ぶ。「無氣力を矯め、虚偽を殺し、意志の若き獅子を呼び醒まさう！ 鋤を持つ手も、劔を取る手も、人間の價値に相違ない。あらゆる人々の爲めに、目的は唯一つしか無い——神がその上に書かれる板となるのだ。」

二人は峽灣の方へ歸つて行く。第二幕はそれで終る。

### 第二幕

ブランドはかの峽灣を抱く故郷の牧師となつてから三年の月日を経た。アグネスは彼の妻となり、もはや子供を持つ身となつ

てゐる。

或る日の午後、ブランドは牧師館の外側の階段の上に立ち、アグネスはその足許の階段に坐つてゐる。此二人の會話に始まる。

「良人、毎日、毎日、額に皺を寄せて、峽灣の方を眺めてゐらつしやるのね！」

「私は母から使者の來るのを待つてゐる。この三年の間それ許り待つてゐたが、つひぞ來なかつた。今日聞けば全く母の死期が迫つてゐるといふ事だ」

ブランドの母親は此界限の大地主であり、又金の爲めには生命をも捨てかねない女である。彼女は金の爲めにブランドの父と結婚したやうな血も涙もない冷酷な女である。例へば彼女の夫

(ブランドの父)が死んだ日の夜、人目をかくれて忍び足で死骸の傍へ行き、死骸を彼方此方に動して、その枕の下から金を奪ひ取つて微笑んだ程の女である。其頃はまだブランドは幼なかつたけれど母親の此仕打ちは彼の心の上に永久取り去られない程の痕を残した。そして母親が其後段々裕福になるにつれてブランドは却つて母親を惡みもし、悲しみもした。彼は三年以前、母親に、罪の金を残らず投げ出して純潔な生涯に入らんことを勧めたけれど、母親は、他の難行ならどんなことでもするが、一切の金を投げ出せと云ふやうな一番大きな犠牲は拂ふわけに行かぬと云つて、兩方共冷たく別れたのだ。

ブランドはその後三年間、母親と同じ村に住んでゐながら、つひ

ぞ逢はうとはしなかつた。そして母親が自分の犯した罪を悔改めるまでは、たとへ彼女が死病の床についてゐても、行つて慰安の言葉をかけやうとはしない。と云つても彼は母親のことを思はないではない。むしろ母親からの使が来るかと、毎日心を痛めて待つてゐるのだ。アグネスは使が来なくとも、行らつしやらなくてはなりませんまい？なんと云つても貴方の母上ではありませんか！と、彼があまり嚴酷すぎることを戒めやうとするけれど、ブランドは自分の血屬だからと云つて、神様のやうにして拜む権利はないと云ふ。

此處へ待ちあぐむだ母親からの使が来る。使者の言葉によれば、半死半生の母親は、病床に起き直つて行つて牧師を連れて来て

くれ、聖餐式の爲めに、私の財産の半分を献げるからと云ふのだ。が、一切か、無かを信奉するブランドは、全體の懺悔でなければ承知しない。そしてたとへ血肉を分けた母親であらうが、神に向つての懺悔は萬人一様でなければならぬ。彼は自分の血族と自分の敵との間に、二つの權衡はかりを使ひ分けることが來ない。ブランドは云ふ、歸つて、病人に私の云つたことを傳へておくれ、神のパンと葡萄酒は清淨な食卓の上に捧げられなければならぬと。

アグネスはブランドに取りすがつて、あなたの仰しやることはあまりに畏しい。私は恐しくなります、あなたは上帝の手づからから揮ひ給ふ焰の劍のやうに見えますもの！そんな畏しい要求は、要求としては出來ても、誰がそれをやり遂げる事が出來るでせ

うかと訴へる。

ブランドは世間の人達の云ふやうな仕方て母を愛しない。虚偽をそのまま抱かない。けれど彼は世間の人達よりも一層深く、一層眞實に母を愛してゐる。それであればこそ、なまじかの慰めてふ言葉で、母親をゆるすことが出來ない。彼は罪に充ちた母親をして、その全體を懺悔せしめ、淨らかな生活に入らしめたいと念じて止まないのだ。彼は彼の母をして眞實ならしめたい。彼の厳しい言葉も母の救ひを念ずるからである。ブランドは涙含んだ聲で世間は腰に劍の無い鞘を下げて、又しても私に手向つて來るのではないか？世間は、その情なまけた頑固かたくな戦を挑んで來て、血の出る程、私を苦めてゐるのでは無いか？とアグネスに向つて自分

の信ずる所を告げるけれど、又アグネスの言葉を考へて

「然うだ、お前の心配にも理由がある。時代の、人間向上の理想は墮落して空虚なものとなり平凡なものとなり下劣なものとなつて了つて、今日では誰か遺言して自分の財産を無名で寄附したと云へば、すぐに聖者のやうに尊敬されるのだ。」

聖者の價格表がこんな迄下落した今の時代から見れば、一切か、無かを信奉するブランドの宗教、道徳はあまりに嚴格すぎて、所謂同情なき悪魔の言葉のやうに思はれるにちがひない。けれど絶対に神によつて生きんとするブランドは、世間の價格表に載せられる安ッポい神の救ひを求めて満足が出来ない。従つて彼は只世間に善く思はれるからとて、彼の信仰をまげることとは出来な

い。勝利を得んと欲するものは飽くまで戦はなければならぬ。

深く落ち込んだものは最高の絶頂に上らねばならぬ。

けれど又、斯うして儼然として語つてゐるうちに、急にブランドの胸は涙にしめつて悲しくなつてくる。彼は此の儼然とした要求の前に立つてゐる時、彼の心は暴風に揉まれながら難破船の破片に乗つて、海上を漂うてゐる人のやうな氣がする。彼はひそかに悶え泣いて、人を責める舌を嚙む。彼が打たんとして手を振上げた時には、むしろ敵の胸を抱きたくて堪<sup>たま</sup>らない時である。彼は弱い人間である。そして弱い人間であればこそ、層一層儼然として進まねばならないのだ。

濕ぼくなつたブランドは、ふと家の内にひとりてゐる子供のこ

とを思ひ出して「アグネス、行つて眠つてゐる小供を見てお遣り、快  
い夢を見るやうな歌を歌つておやり、赤兒の心は夏の日の静かに  
澄んで眠つてゐる沼の様だ」と云ふ。アグネスは蒼ざめてブラン  
ドさん、何うしたのです？ 貴方は思想の矢を何處へ向けなさつて  
も………何時でも小兒の方へ歸つて來ますが！と訊く。「罪なき  
ものは生くべし」とはブランドの答である。

ブランドの子供は重い病氣に罹つてゐるので、ブランド夫婦は、  
子供の生命に間違ひが出来ないやうにと、日々念じて居つた。そ  
して兩方ともその危険に迫つてゐることを知つてゐながら、明ら  
さまに口に出して云ふことを怖れた。

ブランドは小さい頃から父にも母にも暖い愛の光りを見せて

貰はなかつた。否、彼の兩親は、彼の心に芽ぐむ愛の光さへも消そ  
うとした位である。そしてブランドは永い間、此世にも暖い愛の  
あることを知らなかつたのだが、三年前アグネスと結婚した以來、  
永い間封印されて彼の心の底にひそんで居つた愛は、一時に妻と  
子の上に漲り流れるやうになつた。

誰しも初めに、一人を愛する事が出来なかつたら、あらゆる人間  
を愛することが出来ぬ。彼は徒らに戀しがつて憧れてばかりゐ  
た。それで心が石のやうに固くなつて了つたのだ。

此冷たいブランドの胸の氷は、今や春の暖かな愛に溶かされて、  
「私等二人には、どんな絶壁も峻しくはない」と叫ばしめるに至つた。  
愛は人を生かし、人に底力ある信念を與へ、如何なる難關にも希望

を以て進ましめる。愛は事物の真相を洞破せしむる唯一の鍵であり、無限に達せんとする唯一の橋梁である。愛は萬人の胸を溶かし合ふ唯一の音楽である。

けれどもその愛は、世の中で云ふやうな、表面だけを抱く愛であつてはならぬ。虚偽の姿をそのままに抱かんとするは眞の愛でない。愛は人々の眞實を呼びさまして、人々の眞實の魂と抱き合うことである。従つて眞實の愛に生きんことを求める人は、絶へず虚偽の愛と戦はねばならぬ。ブランドは云ふ「私が唯一つ認められてゐるものは神の愛のみだ、それは柔和なものでない、弱々しいものでもない、死際の呻吟うめきごゑにも動かされないものである」と。彼はまた語る「併し、この神経の無い情け切つた時代には、眞に最上の愛

は——憎むといふ事だ！憎む、憎む！この短かい一綴りの言葉から宇宙の戦争が出て来るのだ」と。

愛と云ふ言葉程、偽て汚されて説明されてゐるものはない、悪魔のやうな狡計たぐひをして、意志の弱い處へ人は愛と云ふ面被オマシをかけ、彼等のあらゆる輕薄な生活を小ざかしく掩ひ隠してゐる。若し行く手の途が峻たがしくて、危い山阪になつてゐると、唯、愛だと云つてそれを避けて了ふのだ。若し罪の易い迂路まわりみちを選んでも、唯、愛だと云つたら、それで猶、希望があるのだ。若し神を求めても努力を恐れると唯、愛だと云ふ——それが彼の獲物への一番近い途なのだ。大きな眼を睜つても迷路に入ると、唯、愛だといふ、それが安全な避難所なのだ。ブランドは斯んな虚偽の愛を憎む。それは人間を

生かす愛てはなしに、人間を殺し、人間を迷はせる迷妄である。それはほんの一時の慰めかも知れぬが、人生の救ひではない。彼は憎み！憎み！と口走りながら室内に馳け込み、しゃんと眠つてゐる天真な我が子の傍に跪いて、涙の止度がないやうに喘へて居る。さながら、救ひも逃道もない人のやうに寢床に身體を投げかけて喘へて居る。アグネスは聞いてゐる戸口から、ブランドの此ありさまを覗いて見て、お、何んといふ優しい愛情がありあまる程この人の鋼鐵のやうな胸の中に隠れて居るのだらう！と思ふ。やがてブランドは蒼青になつて跳ひ上つた。兩手を握り締めて。彼は子供の姿の上に何を見たのか？……子供の病氣は重態に陥つてゐ

た。

斯くして私達讀者は、業慾な彼の母と、天真な彼の幼児とが、殆んど同時に危険な状態に陥つたことを知る。イブセンは之れによつて何を暗示しやうと云ふのだろう。その判断は讀者各自の自由である。

市長が訪ねて来る。

彼の用件と云ふのは、ブランドの母親はやがてのうちに死ぬ。そうなればブランドは當然、遺産を相続して、大へんな富裕になる。富裕の身になつたら何も苦しんでこんな偏鄙な所にあるよりも、広い世界へ出た方がブランドの身の爲めになる。こんな前置から始まつて、ブランドのやうな人間が此土地の人間と一緒に

居ることは、恰ど狼と鵝鳥と一緒にゐるやうなもので到底平和になつて行かないから此土地から去つて貰ひたいと云ふのだ。そして若しブランドが此忠告を受けなければ彼の身に危険が起るにちがひないと云ふ。

「凡て成功に要する第一の條件は自分から國民の要求に應ずる事です。……何卒私の云ふことを善く御會得なすつて下さい！ 貴方は廣い社會で戦ふに適當した力を授かつてゐられる。併し、絶壁の劈目さげめの主人公や谷の岸の自由な人間になるのを誇とするやうな百姓、漁師等には有害なのです……。貴方の計畫は斯うだ。人生と信仰との一致といふのは——木炭と硝石と硫黄と一緒によく混ぜ合せると終に煙硝が出来るやうに、神の戦と、馬鈴

薯の耕作と一緒にたにしてへといふのらしい。處が、此處では貴方のやうな計畫は無駄な事です。それはもつと大きな廣い世間では聴く人もありません。さういふ所へ行つて貴方の偉い要求をなさるが善い。我々共には、この沼と海とを耕させて下さる。

之れが世馴れた市長の忠告である。併し、此市長の忠告に従つたなら、ブランドは自分の魂も、その魂の見てゐる理想も置き變へなければならぬ。けれどもそれはブランドのやうな人には出来ることでない。彼は彼自身であるやうに求められてゐるのだ。彼の主義は彼の勝利を得るまで擔つて行くべきものだ。彼は自分の立つてゐる國が明るく輝いてくるまでは、それを擔つて行か



ねばならぬ。永い間、世馴れて官吏の屬僚仲間が、歌て眠らせた人民を新たに醒してやらねばならぬ。彼等は完全な者に鑄ひ上げられる筈だつた人々の靈魂を、型に嵌まつた元氣のない鈍なものにしたのだ、血も涙もないもの、向上の熱を失つた墮落者を、彼等は中庸なものと云つてゐるのだ。

彼等が何んと云つても、ブランドは此處に踏留らねばならぬ。彼は働くべき場所を選び好みしてはならぬ。自分の天職を知つて、それを行はうとする者は、神が火の言葉で壁の上に書かれた「汝の場所は此處なり！」といふ字を見なければならぬ。ブランドの決心は、飽く迄此土地に踏み止まつて、虐げられた多くの人達を救はんとすることである。ブランドは云ふ………

「若し私が御説に従うたら、私自身を失ふのです」

「唯一人で戦ふものは絶望ですよ」

「最も善きものが、私と共にゐます」

「然うかも知れませんが、併し最多数の者は私に睨いて來ますよ」

斯う云つて市長は悠長な微笑を浮べて出て行く。

そこへ醫者が訪ねて來て、ブランドの母の死を告げる。そして母親が死ぬまで一生懸命此世の財産に縋り附いて、懺悔をしなかつたことを語る。ブランドは非常に感動して蒼白になる。そこへまた、恐怖に襲はれた様子で、アグネスが來て、子供の病氣の危急を告げ、醫者を連れて去る。まもなく醫者はブランドの處へ來て、子供の病氣は愈々重態に陥つたから、子供を連れて天候險惡な

此土地を一時も早く立ち退いた方がいゝと云ふ。そうてなければ子供は助からないと云ふ。ブランドは今、子供の生命を助ける爲めに他へ行くべきであるか。若し他へ行くならば彼は此教會と此村民を捨てなければならぬ。父としては其子の生命をどこまでも保護しなければならぬ。牧師としては飽く迄この土地に踏み止まつて救ひの道を説かねばならぬ。一切か、無かの信念を以て進んで来たブランドは、今此二途に立つて何れを擇ぶべきか。勿論彼は子を犠牲にしても神の道を踏まねばならぬ。ブランドは迷うた。彼はつひに激しく頭をかきむしりながら私は今、盲目になつたのか？前から盲目なのか？と叫びながら前方を見つめて儼とする。又迷ふ。

アグネスは仕度を終り、子供を抱いてくる。「サ、行きませう！」ブランドは妻の催促を受けるけれど未だに判断がつかない。「サ、行きませう！」。何處へ行くべきか。入口の方へか、戸外の方へか。死か生か。彼は尙ほ暫く悩んで居つたが遂ひに決斷がついたらしく、サ、行かう！と明白り叫ぶ。そして入口を指して此教會に踏み止まる意を示す。アグネスは小供を兩手で高く上げて、神よ！貴方の求め給ふ犠牲を私は貴方の眼の前に捧げます。殉教者の火に焼かるゝ私の一生涯を貴方は導き給へ！と叫んで家の内に入る。ブランドは暫く前の方をキツと見つめて堪らず泣き出し、兩手

を頭の上に握り合せて、階段の上に身を投げかけ、叫ぶ。

「キリスト！キリスト！光りを與へ給へ！」

#### 第四幕

クリスマス前の夜、柔かに飾り落すやうな雪は、しきりもなく降つてゐる。

アグネスは子供に死なれて以來、見るもの、聞くものにつけて、亡き子の面影を偲んで泣いてゐる。たとへそれはブランドが云ふやうに、返へらぬ繰り言であるにちがひないし、又神をけがすことも知らないが、彼女はあきらめやうとして、あきらめられない。彼女の靈魂からはまだ生々しい血がにじみ出ている。彼女の意

志の力はスツカリ吸ひ取られて了つてゐる。

「考へて御覽なさい……去年はあんなに可愛くつて健康でしたのに、今年はもう私の見えない所へ連れて行かれました。」

アグネスは、昨夜、その子の幻像を見た。その子は、バラ色の頬をして、いつも着て居つたやうにやはり小さいシャツを着て、そつと彼女の部屋へ忍んで來た。そして彼女が淋しく眠つてゐる寢床へ、ヨチ／＼した歩調でやつて來て、お母さん！と云つた。その子は兩手を擴げながら微笑んで、温めて頂戴！とでも云ふやうであつた。アグネスは斯うした昨夜の幻像を今もなほ思ひうかべて亡き子の可愛さに涙する。

「ア、あの小さい體が凍りついて、あの冷たい土を枕にしてゐな

ければならぬとは！  
 とアグネスは嘆く。彼女は死んだ子供を生きて居つた時と同じやうな偶像に書いて悲しんでゐる。彼女はその偶像を壊すことが出来ない。又それが彼女の凡情によつて書いてゐる偶像であることを知らない。ブランドは此偶像を破壊させやうとして土の中に横はつてゐるのは屍骸だ。小兒は神の處にゐると云ふ。けれど彼女は此言葉を聞いて驚き、オ、悔みもなさらないで、よくもまあ、そんなに私達の血の出でゐる生傷を引裂きなさるのですね？」と叫ぶ。アグネスは世間一般の人達の考へる如く死骸のあるところに魂もあると思つてゐる。だから彼女にとつては雪の下に眠つてゐる子供が、直ちに天國にゐる子供である。之れは古い

教會の考である。けれど新しい教會即ち眞實の宗教を求めるブランドは、此古い傳習をそのままにして置くことは出来ぬ。氣の毒であつても破壊しなければならぬ。彼はアグネスの病根をそのままにして置いて治療することは出来ぬ。それを治療して健全な信念生活を導かんが爲めには、たとへ生血の滴るやうな所でも切解しなければならぬ。アグネスの病氣の癒るまでには、まだ幾度も生傷を啄かねばならぬ。アグネスは云ふ。  
 「でも、何卒勘忍をしてゐて下さい……私を見捨てないで、後から躓いで行かせて下さい。貴方の強い手を貸して私を導いて下さい。そして優しく、優しく私を叱つて下さい！魂がまだ苦しみ呻いて、生命がけの戦ひをしてゐる最中には貴方の聲が雷の鳴り

ひびくやうに聞えます。この苦痛を紛らすやうな、柔しい憐みをかかけては下さらないのか？私を勵ますやうな、私に朝日の上るのを指して見せるやうな事はして下さらないのか？貴方が私に教へて下さつた神様は、その玉座の王者であるらつしやる、私の淺ましい母のする嘆きをした顔で、何うしてその方へ向かれませう？」

「お前は一層以前に知つてゐた神様へすがり度いのか？」

「いえ、決してそんな！でも私は日の出る方へ、光明の方へ、暖い、黄金色の日光の方へ折々憧れます」

「アグネスに取つては、ブランドはあまりに大きすぎる。彼の言葉、彼の仕事、彼の目的、彼の峻嚴な意志、そうした彼の總べてが彼女に取つて大きく高く、そして嚴格である。けれど彼女はブランド

の境地へ行きたくないのではなくて、そこへ行かんことを熱望してゐるのだ。眞實の救ひに出逢ひたいのだ。只彼女にはブランドの境地へ直ちに行くべき梯子が見出せないのだ。又、之れは只ブランドとアグネスだけの問題ではなくて、村民とブランドとの間でも同じことである。眞實は直ちに群集のものとはならない。眞實に達せんとするには方便の梯子が無ければならぬ。アグネスの要求するのは此方便である。「オ、嚴しく急ぎ立てないで、私の魂を導いて下さい。」彼女は健氣にもあらゆる悲しみを諦らめ、湧き上る涙を乾そうとする。そして彼女の全生涯をブランドに捧げ、光明の世界に住せんことを誓ふ。

ブランドは彼女の此決心を聞いて大に喜び、主よ、かよわき彼女

に爾の力を加へさせ給へ！……私は壓迫に堪へる力を持つて居ります、私に二倍の苦悶を與へ給へ……併し、彼女には慈悲をかけさせ給へ！」と祈る。

けれど、たとへ彼女が諦めやうとしたとて、人間としてどうして諦めることが出来やう。思ひ出すまいとしても思ひ出さずにゐられぬのが人間ではないか。諦めやうと云ふことは、むしろ諦められぬと云ふことでは無いか。アグネスはまだ救はれぬ。

彼女は、暗くなつたので蠟燭に火をともし、蠟燭の火は、今迄の暗い冷たい寂しい胸の中まで暖かにするやうであつた。彼女は、その灯を眺めながら、また、ふと亡き子のことを思ひ出し、墓を見やうとして窓際へ馳けて行き、窓掛を引きあげる。ブランドは歎息

しながらその窓を閉め切れと云ふ。アグネスは窓掛を引き、「さあ、私が閉切つて了ひました。でも、短い夢の中で果敢ない慰籍を求めたからと云つて、神様はお怒りなさらないだらうと信じてゐます」

「勿論、さうだらう。神は慈悲深い裁判官だからな、そして折々、お前が偶像を禮拜する事があつても、寛大に見逃してゐられることだらう」

とブランドは皮肉を云ふ。アグネスは泣き出して、「オ、では、何處まで行つたら神様の御求めに適ふのでせう」と嘆く。ブランドは告げる。

「一切を捧げなければ、大海へ物を投げ込むのと同じ事だ。……」

お前の記憶と愁嘆とがまだ残つてゐる。お前の憧れと、罪深い嘆息とが……。お前が笑つたものをまだ嘆いてゐるやうでは、お前は徒勞に底のない淵へ物を投げ込んでゐたのも同然だ！」

アグネスはブランドの嚴しい言葉を聞いて身慄ひする。けれど人は最後の淵に臨むときは、如何に氣の弱いものでも不可議の決意に促されるものだ。悲哀の極には軽い微笑が浮むものだ。その微笑みには静かながら底の底まで衝き入る力が籠つてゐるものだ。そして長い間氣付かずに居つた或る神秘の力が、その底見つめてでも居るやうに、正面にデツと瞳を据へ、ワナ／＼と慄へ、「エポバを見る者は死すべし」と叫ぶ。亡き子を忘れよ、嘆きを忘れ

よとは、アグネスに取つては、汝死せよと云ふやうなものだ。けれど、斯うして段々ブランドが肉薄して行く毎にアグネスは段々今迄無自覺的に所有して居つた偶像を一つ一つ壊して行く。彼女はその度び毎に身を切られるやうな苦痛を感ずるけれども、不思議にもその度び毎に神にたよる念が強くなり、神に恵まれてゐることを感謝するやうになる。

「私の小さい教會は廢頽て了ひました」

「それは祝福の風が吹いたのだ。そしてお前の心の偶像を倒したのだ。爾の上に平安あれ——爾に依つて、私も、私の天職の上にも平安あれ！」

ブランドは斯う答へて自分の部室の方へ行つて了ふ。アグネ

スは獨り残つて、つくづく自分の身の上を思つて居る。そのうちに又しても知らずくのうちに亡き子のことが胸に浮ぶ。あまり冗長になるけれど、アグネスの心を覗く爲めに、その獨白を全部寫し取つて見やう。なぜなれば、その獨白の上に切ない人間の心が語られてゐるから。

さあ閉め切つた亡き子の墓が見えないやうに窓を閉め切つたのだ。——すつかり錠を下して了つた。何んな熱情も悉皆封をして了つた、悲歎にも歎息にも封をして了つた、墓場にも封をして青空にも封をした、感ずる事も封じた——そして忘れる事にも！外へ出やうか？死んだやうに寂しい此部屋では、息も塞がりそうだ！戶外？オ、何處へ出るのだ！怒つた眼が空からは睨み

つけてゐる！假令高くも低くも飛べた所が私の心の寶物を持つたまま何處へ行けやう？私はこの心のうちの恐しい沈黙の空、虚から飛んで出やうとしても出られやうか？（ブランドの部屋の戸の方に耳を敬て高い聲で讀んでゐらつしやる、私の聲は聞えはしない！助けてくれるものはない、癒す者もなければ、慰める者もない！仕様ががないのだ。神様は忙しい。今日は多くの子供を持つた幸福な地上の恵みの豊かな人々の歌や、讚美や祝福ばかりに耳を傾けてゐらつしやる。クリスマスは歡喜のお祭りだもの、神様は私などを見ては下さらぬ、淋しい母の愚痴などには氣を止めても下さるまい、忍び足に窓に近寄り、窓掛を明けやうか知ら。明るい煌々しい光明がさして、彼兒の赤裸な黒い寢室から恐しい夜が



逃げ出すやうにしてやらうか？否、彼兒はもう其處には居ない、クリスマスは子供達のお祭だから彼兒はもう自分で起上つて来て、事に依つたら母のゐる薄暗い窓ガラスへ小さい手を擴げて、無益に叫んで立つてゐるかも知れない。あれは赤兒の聲ではないか？アルフ（亡き子の名や）。お母さんはもう何うすることも出来ないんだよ。すつかり、閉め切つて、錠を下ろして了つたよ！それがお前のお父さんの命令だから！アルフや私は今は開けてやれないのだよ！お前は聞分の善い子だからね！お前も私も、お父さんに苦勞をかけないやうにしませう、だから天國へ歸つてお行きよ、天國には喜びもある、光明もある。お前の楽しい友達がお前の早く歸つて一緒に遊ぶのを待つてゐる。お、でも皆に泣顔を見せた

り、又お前が小さい手で叩いてもお父さんが私に錠を明けさせなかつたなどと云つてはなりませんよ。小さい子供には、大人になつたものの知つてゐることは分らない。唯、お父さんは悲しそうにしてゐた、歎息をしてゐたと仰しやい。お父さんは庭中の美しい花を摘んで、お前の花環を作つて、下さつたとお云ひよ！それがお父さんの仕事だよ！分つたかい？耳を澄まし、愕然として頭を振り、お、私は夢を見てゐる！錠や壁丈が私の愛を隔てるのではなかつた。淨火の焔に試鍊される時には、その苦悶の中に、二人を隔てる壁は獨自に落ちやう。重い門も打碎かれやう。閉ぢ込められた筈も開いて、牢獄の錠も叫び出そう！お、離れ、になつた二人が又一つになるまでは、まだ、いろいろな難行苦行をせね

ばならぬ。私は黙つて苦勞をして、彼人の命令のまゝに底知れぬ淵を満す爲めに働かう。私は自分を苦めねばならぬ。私は意志を持たなければならぬ！併し、今夜はお祭りの夜だに——去年のお祭りとは斯うも變つたものだらうか！待て！出来るだけ賑かにしなくては！私の寶を持ち出して來やう。私が幸福を亡くしてからは、あの寶物に何よりも尊い價のある母の魂が宿つてゐるのだから。（アグネスは箆筒の前に跪き抽斗より種々の物を取り出す。この時ブランドは戸を開けて、言葉をかけんとし、アグネスの振舞に心附いて彼は口を<sup>さ</sup>み、立ち留つてゐる。アグネスはそれに氣付かず。そうら、この衣服、この覆衣は、あの小さい兒の命名式の時に着せたのだ、此下に外套を着せてやつたのだ——高く

差し上げしげ／＼と眺めて笑ふ）まあ、何といふ氣の利いた可愛い着物だろう！あゝ、あの兒がお祭りの晴衣を着た時に可愛らしく見えたこと！そら、あの兒が外へ出ぞめの時これが首巻、これが冠らせた頭巾、あの時には大きくて合はなかつたが、直ぐ小さくなり過ぎて了つて——これは一緒にあそこへ置きませう、手袋に靴下——（おゝ、あの足が！）そして寒さに當てられないやうに絹糸で編んだ新しい長頭巾、まるで着せもしないのでこんな綺麗で可愛らしい。おゝ、其處の暖い着物で巻いてやつたら、旅へ出てあの小さい體が嵐にも當らないで済んだのだが……  
ブランドはアグネスの此様子、此言葉によつて苦悶する。「おゝ、神よ！私の努力は無益です！私は彼女の最後の偶像の宮を毀す

ことは出来ませぬ。然うせねばならぬものなら誰か他の人を送つて下さい！」と叫ぶ。

斯うしてブランドはアグネスに對する自分の力の薄弱さに苦悶するけれども、一切か、無かの信條は、彼をして更に強からしめる。彼はアグネスに向つて亡き子の着物類や其他一切のものを乞食に與へよとせまる。アグネスはその尊い思ひ出の寶を乞食に與へることは亡き子の神聖をけがすがやうに思つて始めのうちには肯かなかつたけれど、お前が死の門前に立留つてゐるのなら、あの兒は無益に死んだのだてふブランドの戒めの言葉に従つて漸く決心する。そして全部を投げ出して仕舞ふ。彼女はその瞬間、自失したやうにぼんやりとして立つてゐるけれど、やがて次

第に輝き切つた歡喜の表情が顔に現はれてくる。そしてブランドの首に抱き付いて、「私は自由な身になりました」と叫ぶ。「お、神様の道の不思議な事！子を犠牲に捧げて私の靈は死の滅亡から救はれた。彼の兒は死ぬ爲めに授かつたのだ。私を勝利者にする爲めに死んだのだ！。彼女は遂ひに死んだ自身の子の上に神の攝理を拜することが出来るやうになつた。先き逝く子供が親の善知識てふ意味を感得するに至つた。彼女はもはや自暴自棄の子ではない。又過去の思ひ出によつて尊き現在の自己を殺してゐる忘恩の子ではない。私は自由な身になりましたと。彼女は實に怖恐に打勝つて、自由の天地へ躍り出た。

「靈よ、爾の苦痛を耐へ忍べ！勝利の價は苦い。一切を失ふのは

一切を得る事だ。失つたものこそ、唯、永久に所有せられるのだ」  
之れがブランドの最後の獨白である。

### 第五幕

吾等は愈々最後の幕へ辿り付いた。吾等は此幕が上らないうちに、此幕に於てブランドの生涯がどんな進展するであらうかを想像するのも面白からうが、私は今迄亂雑になつて居つた印象を整へる爲めにブランドの過ぎ來し方へ瞳を向けずにはゐられない。私は先づ第一幕の初めに於て、淋しい霧に包まれた山岳を思ひ出す。そこには又見えつ隠れつ獨り旅路をとぼ／＼辿る人影を見た。それが此劇の主人公なる牧師ブランドであつた。彼は既

に傳習の世界から何物をも見出すことの出来ないことを知り、自分の棲むべき世界は自分で發見せなければならぬと思つた。只自己である。自己のみが一切の基調である。自己より生れないものは總べて自己の眞實の所有でない。斯うして彼は自己發見の旅に出たのである。

されど一度び自己の旅路へ一步踏み出して見ては、さすがにその道路は險惡である。他人の造つてくれた道を歩いてゐるやうに、他人に手をひかれて歩くやうに安樂なものではない。氷の下には地獄に續く穴が隠れてゐる。いつ何時彼はその穴へ落ち込むかも知れぬ。けれど大なる生に往かんとする大往生人は常に地獄一定の覺悟がなければならぬ。生を求むるものは先づ死の

覺悟がなければならぬ。中途半端はゆるされぬ。彼の瞳は遂に一切か、然らずんば無の信條に燃え輝いた。彼の此信條は、一時を糊塗する耽美主義者と相容れない。又生命の流れに嚴肅の節奏を聽くことの出来ない虛無主義者とも相容れない。彼は叫んだ「起て我が靈魂よ武器を取れ！帯びたる劍を抜け！」と。

斯くして彼はひたすら心願の故郷へ訪ね入つた。けれど、いく年捨てゝ省みられなかつた故郷の荒廢よ！如何に悲壯な昵を彼はその故郷の天地へ向けたであらうぞ。それは嶮しき峭壁に圍まれた峽灣の傍、古びて頽敗した會堂が附近の小高い丘の一角に立ち、嵐が叫ぶ慘慄たる境地である。それは又直ちに、自己の郷土を見渡したときのブランドの胸中の象徴である。けれど如何に

自己の境土が慘慄たるものであつても、それは自己に賦へられたものであり、それを外にして彼の求むべき何ものもない。此慘慄たる荒廢の郷土こそ彼の耕すべき唯一無二の畑であり、榮光に接せんとする道場である。涅槃の蓮花は自己の泥田からのみ咲かねばならぬ。彼も亦、生命を救はんとして、怒濤逆卷く大海に漕ぎ出し、全生命を賭して蓮花を咲かせんと試みた。そして彼は此土地の牧師となつた。

彼の道場は更に母親と彼との上に、妻と彼との上に、子と彼との上に、群集と彼との上に開かれた。そして之れ等のすべての上に彼は只神の救ひを念じた。それは恰かも親鸞が「只念佛して」と叫んだやうに、彼も亦、神を求め旅に於てのみ一切と接觸せんと

した。又親鸞が親鸞は父母の孝養のためとて、一遍にても念佛まうしたること、いまだ候はずと叫びたるやうに、彼も亦、親であるからと云つて、肉親者であればと云つて、特別の救ひを説くことが出来なかつた。すべてが神の子である。神はすべてのものに同じ救を以て臨んで居る。彼も亦、群生海の一人として、群生海のすべてに臨まざるを得なかつた。

彼は斯うして、自己の魂を耕し始めた。そして幾多の奮闘の結果、荒廢の地も漸く濕ほひ、人々は古き教會に古き傳習に別れを告げて、新しき教會の建設の日を待ち望むやうになつた。けれどその新しき教會が果して各々の胸の上に建てられるであらうか。各々がその會堂に集つて讚詠の生活を歌ふであらうか。第五幕

は茲に高く絞り上げられるのである。

ブランドは母の遺産を投じて、新しい教會堂の建設に取り掛つてから、既に六ヶ月を経て、漸く献堂式を擧げるまでになつた。そして此建築に従事してゐる間に、妻のアグネスは此の世を去り、今やブランドは、母なく、妻なく、子なき、天涯孤獨の人となつてゐる。

それは献堂式擧行の日である。新しい會堂は、今日の式を祝すべく裝飾されてゐる。霧深き早朝、河水は靜かに會堂の傍に沿うて流れ、役僧は會堂の外側に花飾りを着けるべく、忙しそくに働いてゐる。そこへ今日の式を祝ふべく、校長が這入つて來て、役僧と共にブランドの偉大なることを話し合つてゐるうちに、牧師館からはかすかにオルガンの響が流れてくる。

「オヤ、誰かオルガンを弾いてゐる」

「あの方ですよ」

「牧師？まあ驚いたな！そんなに早くから起きてゐなかつたのか！」

「牧師さんは昨夜、枕に着いておやすみなすつたとは思へませんよ」

「何うしてだな」

「何も彼もお氣の毒な事ね、彼人は寡になられてからと云ふものは、いかにも淋しくてたまらなささうです。まるで悲歎を隠してはゐられるだが、時には押へ切れない事がある。彼人の心は恰度、一ぱいに張り切つて、裂けてゐる瓶のやうなものだ。そら、弾い

てゐられる。お聞きなさい！調子が一つ一つ、亡くなつた奥さん

や小供の爲めに泣いてゐなざるやうでせう」

「まるで皆で、話し合つてゐるやうだ——」

「一人は苦しんで、一人は慰めてゐるやうだ——」

斯うして、響きよせるオルガンの節奏を聴きながら、二人はその節奏の中に傳へられるブランドの悲しい心に満腔の同情を寄せ、共に泣かうぢやないかと役僧は云ふ。けれど校長は涙を流したからとて救はれないことを述べ、泣くに泣かれぬ苦痛を噛みしめて、各々が各々の大道に向つて進むことがブランドの信念であるから徒らに涙に流されたり、身を泥土の上に墮すやうなことがあつてはならぬと云ふ。

二人は更に古い教會の破壊される時の物凄さや新しい教會の建てられた時の不安さを物語つた後、二人共此場を去る。オルガンの音は突然高くなつて、やがてハタと止む。稍々暫くの後ブランドが出てくる。

「駄目だ。力の緊張つた音色を出そうとして根限りやつても駄目だ。音楽が悲鳴になつて了ふ。ブランドは斯く叫んで、痛しき腫を自分の心境に向ける。彼は無闇に遣つて見た。徒らに腕いて見た。だが、オルガンの調子は外れてゐる。彼は歡ばしい祈禱を口に出したいと思つた。然し彼の出した聲は、恰度鐘の入つた鐘の音のやうに掠れた呻吟になつて響き返されるばかりだ。彼の今にあつては神は高壇の上に座して、彼を睨め付け、怒つて手を振つて彼の祈を拒絶せ給ふやうに思はれた。

彼は神の宮殿は偉なるべしとて、それを堅く信じて、それを誓つた。そして古き小さな殿堂を恐れもなく打壊して大地に引倒し、今や新らしい殿堂を打ち建てた。人民は其前に集つて、あゝ、いかに偉大だ！と一齊に叫んでゐる。けれどそれは果して偉大であらうか？その殿堂は、ブランドの思ふことを満足させてゐるであらうか？彼の燃ゆるやうな熱情と、永遠に戦はんとする求道の火が唯これによつて靜まるであらうか。彼は苦悶の末に、あゝ、アグネスが生きて居てくれたら、斯んなに無益に苦悶する事もなかつたであらう。彼女は小さい物の中に偉大を認める事が出来た！と嘆き、神よ！我に光りを與へ給へ、否らざれば千仞の地の底



に投げ入れ給へ！」と祈る。市長は今日の盛儀を祝すべく、正装してやつてくる。そしてブランドの名譽が忽ち全國に響き亘るであらうなぞとブランドを祝福するけれど、群集の心を能く知つてゐるブランドは、群集の賞讃から寧ろ逃れて、野獸の穴にても隠れたい位に思つてゐる。ブランドは云ふ、我々のしたことは、唯古い虚偽を、新しい虚偽に變へた許りだ。併し市長にはその意味がわからないので、只外的の偉大さのみを讃めちぎつてゐる。そして今日ブランドが、王室から名譽と尊敬と勳章とを受けることを報告して、盛にブランドを讃嘆する。ブランドは更に苦しみ初める。そして、市長を置き去りにして一人廣場の方へ出て行く。

そこへ又、今日の盛儀に列するべく特に派遣された副僧正が来て、ブランドの事業に就いて口を極めて讃嘆する。併し副僧正の宗教觀は、國家の爲めの宗教とか社會の爲めの宗教とか云ふものであつて、魂の切なる憧れに向つて勇往せんとするブランドに取つては、もとより問題の焦點が外れてゐる。ブランドは今や自己の行衛に迷つてゐる。彼は今それをどうにかせねばならぬ。そしてそれが彼の目前の大事である。この往生の一大事に明確なる行方が定まらぬ間、國家的宗教だの、社會的宗教などは問題にならぬ。殊に副僧正がブランドに語る所によれば、貴方は一人一人の靈魂を地獄の火から救ひ出す爲めの牧師ではない、教區全體を神の恩惠の雨に潤させるべき人だ」と云ふやうな、非實際的の議論

である。宗教を以て都合や手段の道具としてゐる。ブランドは自分と副僧正との間に、どうしても手を取ることの出来ぬ溝の横はつてゐることを知り、且つ自分の辿るべき道の更に遙かなことを望んで「お、果の知れぬ並樹道が私の眼の前に展ひらび開ひらけた」と叫ぶ。

献堂式挙行の時間は刻々にさし迫つて来る。ブランドを尊敬する群集は堂前に漲つてブランドが今来るか、今来るかと待ち構へてゐる。時間はつひに來た。けれどブランドの顔は見えない。熱し切つた群集は、市長や副僧正やその他の牧師や役員に押しかけて、早くブランドを案内して來よと叫ぶ。市長は息を切つてブランドを迎ひに來る。

群集はつひに埒らちを引倒し、行列を滅茶々にして、ブランドの居る方へ流れ込む。大勢は口々に「牧師さん」と叫ぶ。ブランドは儼然として群集の前に立つた。

「お、沈よど滞どんでゐた水の上に、遂に急流が動いて來た！人々！お前達は道の十字街に立つてゐるのだ！お前達は全力を以て新らしきものを意志せねばならぬ。あらゆる腐敗したものを打捨てるのだ。然あるべく、然かあらねばならぬ大教會の打建てられる以前に！」

ブランドは之れを前置きとして、直ちに血の出るやうな自分の魂を掴み出して群集の前にさらけ出すやうな告白的大演説を始める。しかも此演説は彼が故郷に於ける最後の告別の辭とな

つたのである。長いけれども此演説は第五幕の眼目であるから全文を紹介することにしやう。——ブランドは更に語り続ける。

眞實私はお前達が、靈魂と眞理とを愛する神に多少とも仕へてゐると考へてゐた時には然う思つてゐた。然うだ、私はお前達が、すこしても神に繋がり得ると考へてゐた時には然う思つてゐたのだ。古い教會は小さい。そして私は臆病であつたのだ。——斯う考へてゐた。參倍——それで充分だらう。五倍——あゝ然うしなければならぬと！私は唯此一事一切か、無かが必要なのだといふ事に氣が附かなかつた。私は妥協の道を踏み迷うてゐたのだ。——併し今日神は語り給うた。今は審判の恐ろしき喇

叭は家の上に鳴響いてゐる——そして私は恐怖の旋風の中に耳を欬てゐる——私はサタンの前に立てるダビテのやうに打挫かれた——今やあらゆる疑は過ぎ去つた。人々よ、妥協の精神は惡魔である！——

ブランドの一語一語が漸々熱を發し火と燃えるに従つて、群集の胸も見えない大きな力にうたれて湧き上つて來た。「惡魔を放逐しろッ！彼等は我々を盲目にした！彼等を打ち倒せ！彼等は我々の力の眞髓を奪つたのだ！」と、群集は口々に叫ぶ。ブランドは更に續ける。

「お前達の靈魂の中に、魔術を以てお前達を縛しめてゐる惡魔が潜んでゐるのだ。お前達は、自分の力を手品に使ひ分けてゐるの

だ。自己を二様に引裂いてゐるのだ。それが爲めに不調和がお前達の頭腦を痺痺せしめる、お前達の空洞な胸を化石せしめる。今やお前達が教會に求めてゐるものは何か？それはお前達の心を引く外觀だ。オルガンの響鐘の音だ。お前達の心を動揺せしむる高い調子のお喋舌、一の技巧の規律にはまつたお喋舌、それは言ふ如く云はぬ如く、又囁く如く、忽ち洪水と溢れ、忽ち雷と響き、忽ち霞と迷るお喋舌の煽を感じずる快樂なのだ。……

偉大な莊嚴な祝祭のために點すべき蠟燭を、お前達は唯形式の爲めに用ゐてゐる。お前達は再び元の懶惰に返つて行けッ！お前達は聾になつて再び元の苦しい勞役に返つて行けッ！お前達の靈魂もお前達の肉體と同じく、日常の股引を着けるが善い、そし

て神の聖書は次の祝祭の周りに來る日迄箱の底に收ひ込まれて忘られてゐるのだ。お、私が犠牲の杯を呑み干した時、夢想したものは之れてはなかつたのだ！私の建てやうと思つた大きな教會は、その天上が唯信仰と教義とを蔽ひ得るばかりでは無い。それ以上に神が存在の權利を與へられた人生のあらゆるもの——朝から夜まで、夜から朝までの日々の争闘、夕の休息、夜の悲哀、青春の血に燃ゆるうらわかき悅樂、胸のうちに正しく安住しうるものは、貴きものも賤しきものも、凡て掩ひ得べきものである。——彼處に泡立ち流るゝ河、裂罅に轟く瀧、嵐の肺臓の響、海の遠鳴り、これ等のものも凡て靈魂に感應して、オルガンの音楽、人々の舌から出る歌と共に、全く一つに熔け合ふべきものである。

此處に爲されたる事業を拂ひ去れ、これは唯虚偽の幻の大なるものだ、その精神は己に滅亡に近づいてゐる。それはお前達の哀れなる意志に似合つたものだ。お前達は朝三暮四の努力をして、向上の心のあらゆる幼芽を枯死せしめるがよい。六日の間お前達は甲板の上の神の旗を曳下して、唯七日目にそれを天國に向つて飄へすがよい！」

ブランドの一々の言葉は、群集の胸に波を打つ。彼等は聲を揃へて「我等を導け！空が暴模様になつて來た！我等を導いて行つて下さい、あなたと一緒になら、我々は勝利を得られる」と訴へせまる。之れを見た副僧正は氣をもんで、ブランドの云ふ言葉は基督教徒としての固有の信仰を告げてゐないから聞いてはいけなないと制

するけれど、群集はブランドの偉容を仰ぎ見てその一語をも聞き洩すまいと、詰めかける。ブランドは副僧正の言葉を引き受けて、又語り出す。

「眞實に然うだ、貴方は欠點を云ひ當てたのだ——お互の欠點この總べての群集の欠點を！信仰は唯、靈魂のみが所有つてゐるべきものだ！その靈魂を所有つたものを一人私に見せてくれ！模索しても、焦燥しても、彼の最善の者を捨てなかつた人、一人私に見せてくれ！お前達は自分の嗜好を追うて踏躓いて來た。而して人生の快樂を感じなくなる迄、手品師の鳴物に合せて跳ね廻つてゐた、それからお前達の靈魂が乾き上つて、凋み果つると、方舟の前で跳るやうになつた！杯を最後の一滴まで飲み干したものは

蹙りだ、白痴だ。——そして、お前達の希望の時が来たのだといふ、  
 懺悔と祈禱とて歎願すべき時だといふ。最初にお前達は神の心  
 象を汚し、二本脚の獣となつて生活して——それからお前達は  
 慈恩の門口に集まつて神を求め、——廢兵としてだ。若し之  
 れが神の王國なら、それは滅びなくてはならぬ！神の救ひの王座  
 は、この老耄た者に何の用があるか？お前達を自己の世継ぎと  
 して選び給ふのは、あらゆる尿管に血汐の高く溢れてゐる時期の  
 みだと神は聲高く宣言し給うたではないか？——お前達が神  
 の王國の勝利者となり得るのは唯小兒としてのみだ！一人もそ  
 の戸口に跣足のまゝ入ることは出来ぬ。來れ！男も、女も、生命  
 の大教會に於て若々しい小兒の顔面を示せるものは！——

市長は、ではその教會を開けて下さいと云ふ。群集は恐怖せる  
 ものの如く否や、その教會ではない！と叫び出す。ブランドは語  
 る。

「その教會には境もなければ限りもない、床は緑の土地であり、高  
 原であり、牧場であり、そして海と峽灣なんだ。天のみが、その穹窿  
 となつて始めて、それが偉大となるのだ。其處でお前達のあらゆる  
 働がなされなければならぬ。その響が讚美歌となつて神に聞  
 かれやう。そこでお前達は日々の勞作に面し而して特に安息日  
 の區別は要らぬ。そこで全世界は樹木の幹の一切が樹の皮は掩  
 はれるやうに、一切を掩はねばならぬ。人生と信仰とが一つに融  
 け合はねばならぬ。日々の勞苦が規則や教理と全く一致して従

事されねばならぬ。そこでは日々の労働は、星の運行の如く、クリスマス樹の周囲に遊び戯れる小供の如く、方舟の前の王の跳舞の如く、一つになつて歩取つて行かねばならぬ。生活即信仰を主張するブランドの叫びは、嵐が野原を駆けるが如く群集の胸に吹き通つた。或るものは歸り去つたけれど、大部分はブランドの周囲に犇々と詰めかけた。そして暗き夜に光が點された！生活と神とに仕へる道は一つだ！と叫ぶ。副僧正はブランドを誘拐者だと云つて、怒鳴り立てる。ブランドは群集に向うて此處を去れ！神は此處に居まさぬ。かゝる人々の中に居給ふ事は出来ぬ、自由の美は天國の美だ！と云ひながら、教會の戸に二重の錠を下ろし、鍵を手にしつかり握つて私は最早、此處

の牧師ではない……と告げて、鍵を河中に投げ棄てる。ブランドは市長や、副僧正の嘲笑をもともせず、更に語る。

「お前達の中の若いものは来い！強きものは来い！生々した息をして、この蒸暑い穴の塵埃を吐き出そう。私に従いて勝利の道を歩め！何時かお前達は覺醒めねばならぬ。何時か高められて妥協と戦を開かねばならぬ。お前達の悲惨なる危地より起ち上れ！お前達の間道の曖昧なる中より飛び出てよ。お前達の敵を見事に打ち破れ、彼に對して死を以て戦ひを宣言せよ……凍り切つた荒野や山を越えて！あらゆる國を越えて行かう。囚はれた人々の靈魂のあらゆる纏綿を解き放ち、淨め、高め、自由にして、獸の痕跡らしきものを打碎き、人間となく、牧師となく

消えかゝつた烙印を新たに押し、全国土を神の殿堂と爲さう！  
かくてブランドの言葉は終つた。そして新らしく築き上げられた會堂は閉ざされ、其鍵は永久に河の底へ秘められた。それは吾等に何を告げることだろう。さはれ我がブランドは群集に圍まれ、群集の肩の上に高く胴上げせられてゐる。「あゝ、偉大なる時が來た！偉大なる幻影が白晝の光の中に、電光の如く閃めいてゐる！斯く群集は歡喜の叫びをあげつゝ、ブランドを擁護して谷間を通つて、山の方へ流れて行く。後には副僧正、市長及びほんの少數の人々が残つてゐる。

ブランドは斯うして故郷を去り、群集を従へて求道の途へ出かけたけれど、ブランドの求道の途はあらゆるものよりも險難であ

る。その途を果して多くの男女や子供達までが辿り行くことが出来るであらうか。ブランド自身さへ幾度もその途から他へすべり出た。アグネスは一生の間その險難に堪えないと云つて訴へてゐたではないか。殊に群集は外から塗られた一時の感激に過ぎない。塗られたものはやがて剝げねばならぬ。その道は只ブランドだけの道である。群集の道ではない。

群集はやがて色々の困難を訴へ始めた。或は腹が空いたと云ひ、或は何處に目的地があるかと云ひ、又は何日まで辿ればよいかと訊く。ブランドは、働く前に賃錢を求めんとするその奴隸根性を捨て、高く飛べと云ふ。けれど疲れた群集は只苦痛を訴へるまでである。ブランドは彼等に告げる。



何時まで此戦が續くか？それは生命の續く迄、一切を犠牲に供して、そして妥協の束縛から汝自身を自由にするまで、一切か、無かの戒律の前にも前達のあらゆる卑怯な疑問を捨て去るまで續くのだ。

群集はつひに失望し、怒る。そこへ副僧正がやつて来て、後から聲をかけて「お、私の小兒！私の仔羊！老いたる牧羊者のいふ事を聴いてくれ！」と云ふ。そしてブランドの行くやうな道は群集の行くべき道でないと言ふ。「狼や熊の仲間入りをして、一體何うするといふのだ？お前達は前達よりも強い其奴等の餌食になつて了ふ許りだよ、お、小兒達！」

群集は今此副僧正の言葉を聴いて、尤ものやうに思ふけれども、

今更歸へるにも歸へられない。殊に校長はたとへブランドの如く強くないにしても、最早副僧正の言葉に従つて以前の生命のない生活へ歸へることは出来ないと言ふ。副僧正はそんなことは直ぐに何んでも無くなつて了ふから、一緒に歸つてくれと言ふ。斯んな問答の續いてゐるうちに、市長が息を切つて来る。そして幾百萬といふ鯁の群が村の峽灣へ押し寄せて来たから早く群集に歸つて来いと云ふ。副僧正は、それを天から與へられた奇蹟だとか、それによつて富裕の身の上になられるとか、さまざま言を盡して誘惑する。市長は云ふ「お前達は今、空しく天を憧がれてなどゐるより他の目的が眼に見えてゐるのだ。他人の喧嘩に涉はるには及ばぬ、唯、寶の海に光明を點けるのを急ぐが善い。これには

血も劔も要らぬ、生命を犠牲にする事も要らぬ、そして長靴に寶を入れてくれる實際的の職業なんだ群集は只鯀の大群！てふ言葉に前後を忘れて、ブランドを見捨て、歸つて行く。副僧正はブランドを詈りながら「人民の聲は神の聲だ」と叫ぶ。

群集に別れたブランドは一人山の道を辿る。山々の上には暴風が起り、深く雪の原を鎖した雲の群を驅逐する黒い山角や絶頂が彼處此處に現れてゐるが、やがて霧の中に隠れる。ブランドは血にまみれて山上に現はれ、過ぎ來し方を眺め群集の意志の弱きことや犠牲を恐れてゐることやを思ひ浮べて嘆き、やがて自分の行方を考へてはつとずる。「私は夢を見てゐるのではないか？」彼は自分の今まで見てゐたのは、病人の頭から出たつまらぬ幻で

はなかつたかと思ふ。霧は山々を包んでゐる。彼は雪の上に身を投げてゐる。ふと、嵐の中に細語こさやくが如き歌の聲が聞える。

汝に決して彼の靈魂は得られない

汝は死ぬべき肉體を持つて生れた

彼の意志に従うとも、悖そむくとも

均しく汝は滅ぼされる

ブランドはその言葉を繰り返へして、やがて靜かに自分の胸を眺める。痛ましき哉禍なる哉彼の胸は只氷の如くに寂しい。彼は黙して泣き出す。「アルフよ！アグネスよ！歸つて來てくれ！」彼は今淋しい山上の氷の上に坐つてゐる。強い北の風は彼の體を刺すやうに吹いてくる。彼は幽靈に掴まれてゐるのだと思ふ。

彼は見上げる。ほの明るい霧は流れて、次第に開けて行く。ふと輝ける衣服を着けた女の幻影が現れて来る。それはアグネスである。幻影はブランドを慰めたり勵ましたり忠告したりする。そして来るべき時代の人々は、滅亡の運命を擔つてゐます」と告げる。幻影はつひに霧立ち單める中に消えさる。

そこへ又第一幕に出て来た破壊主義者のゲルトが出て来て、お前さんは今何處に立つてゐるか知つてゐるの？と訊く。ブランドは私は階段の第一歩に立つてゐる！上りは長い、そして足は痛んでゐると答へる。

誠にブランドは今や血にまみれて疲れ切つてゐる。彼の心は狂はんばかりに亂れてゐる。けれど彼は益々救ひによつて生き

んことを祈願して止まない。今こそ！數千哩の彼方へ！彼はどんなに飛んで行き度く思つたらう。光と太陽と慰藉のある處へ、神聖な平和の沈黙のある所へ、生命の夏の王國へ！そして此燃ゆる祈願を胸に抱いたまま、くづれ落つる崩雪の下になつて死んで仕舞ふ。彼は崩雪の下に伏して上方を見上げ、お、神よ、死の深淵に陥れる我に答へ給へ！人間最上の大なる意志を以て戦ひしものは、遂に贖罪の一部にも償しませぬか！と叫んだ。

——それがブランドの一生であつた。戯曲は之れで終る。

## 嚴肅なる人間心

露西亞の監獄内の出來事であります。

或る囚人……それは何かの行き違ひから罪なくして監獄へ入れられました。彼は若い年にも似ず、明けても暮れても、自分の罪の無いことを同輩の囚人達に物語つては泣いて居りました。彼の涙は、水を一ばい含んだ海綿を握りしめる時のやうに、目から、鼻から、口から、顔の至る所から泌み出るやうでありました。彼には自分自身の生活がありませんでした。いつも他人の顔色ばかりを伺うて、ひたすら他人に良く思はれたい同情して貰ひたいと云ふより外に、他の何物をも考へることを知りませんでした。

た。いつもペコ／＼お辭儀をして、メソ／＼泣いて、自分は悪人ではないと言ひ譯をする外には何んにも能のないおひとよしてありました。

けれど彼の同輩の囚人達は、彼のあど／＼した眼や、無氣力の家畜のやうな姿を見る毎に、腹をか／＼へて馬鹿笑ひをしました。なぜなれば彼等は斯うした自信のない、自己の生活を持たない人間を彼等の仲間にするのを耻としたからであります。そして囚人達は此の男の罪の無い事を知つてもゐるし、腹の中では氣の毒だと思つてもゐるのですが、それでゐて誰でも彼を馬鹿にして笑つたりいぢめたりしました。彼等は此男を「不景氣な小豚と呼びました。そして「おい豚！一寸來な」などと云ふのが常でありました。

彼は動物のやうに孤獨を嫌つて、こんなに嘲弄されながらも、「ハ  
イハイ」などと腰をまげて驅けつけます。けれど囚人達は態と六  
ヶ敷い顔をして、腹の底を見せないやうにしました。

「あや、お前は何の御用だね」

囚人達は斯んなことを云つて造り笑ひをしますけれど、彼は馴  
々しく囚人達の傍へ坐り込んで、云うても甲斐のない過去を物語  
つて泣きました。

そして終りには皆から叩き出されました。

露西亞の監獄では國事犯の囚人が減刑を願ふ爲めに斷食する  
ことが習慣になつてゐるさうですが、或る日此監獄にも斷食が始  
まりました。ところが彼はそれを大へん怖れて、狂人のやうに泣

き叫びながら歩き廻りました。けれど誰に訴へても對手にして

呉れないので、彼は其翌朝他の入達の眞似をして

「皆さん、私もあなた方と一緒に斷食をしませう」

と、眞青の顔をして宣言しました。

「なあに、やるなら勝手にやるがいゝよ」

と云ふ風に皆んなは冷笑しました。この憐れな男は一人て斷食  
をして、斷食の濟む頃病氣になりました。皆んなは驚いて彼の傍  
へ行つて見ると、彼は高い熱にうかされて、自分の悲しい一生を物  
語つたり、親や兄弟のことや、自分の罪の無いことを語つたり、戀し  
い本國の名を呼んだりしました。

彼は死際になつて漸く氣が確かになりました。そして彼の傍

に集つてゐる大勢の仲間に向つて、彼の死ぬ時に「マルセイユの歌」を歌つてくれと頼みました。それは自由の精神に漲り溢れる歌であります。大勢の人達は驚きました。たとへ死際であれ、彼が最後に自由へ導かれたことを知つて皆んなは身震ひして喜び叫びました。そして彼の眼がだん／＼死に近付いたことを示した時に、皆んなは燃えるやうな涙を流して泣きました。

彼は遂ひに死にました。……マルセイユの歌は若々しい落ち付きのある聲で歌はれました。そして其旋律は皆んなが日夜忘れぬ戀しい本國へ、血に塗れるやうな希望を運びました。

「皆んなが此英雄の前に跪かうぢやないか」と或る男が叫びました。

彼等は監守の銃剣をも怖れずに、自由の歌を高く、益々勇しく歌ひながら、此殉教者の魂を讃めたたへました。

此物語は現今露西亞文壇の巨匠として謳はれるアンドレエフの短篇「マルセイユの歌」の筋であります。アンドレエフの作物は、かの二葉亭四迷によつて譯された「血笑記」を始めとして、其後幾多の短篇長篇が我國の文壇へも移植されてゐることです。今更此作者の傾向などを論ずるまでもないことと思ひます。又それは私の目的ではありません。私は只此の「マルセイユの歌」を讀んだ後の私の感じを語りたのであります。

露西亞を思ふ毎に先づ私の胸をかすめるものは、あの果てしない大陸の寂しさであります。さながら不思議なる巨大の動物が、

暗い空の下にゴロツとして寝てゐるやうに思はれます。彼はせつこましく叫びはしない。けれど眠つてゐるのではない。それは總べての苦を忍んでゴロツと寝てゐる、彼は悲慘な人生の前に全身を投げだして、如何なる苦を受けてもその苦を靜かに受けながら大きく生きやうとしてゐる。彼は悲慘から逃避しない。むしろ悲慘の母胎の中に人間の郷土が隠されてゐるやうに思つてゐる。恰度彼の軍隊がいつも最後の勝利を堅く信じて、恐るべき憂苦をも厭はず、黙々として堪へ忍んで行くやうに、露西亞人の魂は常に「永遠の勝利」を待ちのぞんで悲慘の中へ進んで行く。しかも其聲音は大象の歩みの如く靜かにして巨大である。まことに全露の魂の歩みは、諸苦毒中、我行精進、忍終不悔である。……

之れは單に私の想像にさへ過ぎませんけれども、常々私の讀んでゐる露西亞の文學書を透して自然に胸の中に形造られたのであります。ところが此頃、ブランドスの露西亞印象記を讀んで、私の永い間の想像に裏書きされたやうに思ひました。彼は斯う云つてゐます。——憂鬱と希望に満ちた限りないひろがり、深く測り知れない一物、新現實主義と新神秘主義の母體……これ等はすべてみな驚くべき程未來に適つたものだ。實際我等が斯の國の秘密を窺はうとする時は、即ち歐洲の未來を窺つてゐるのであるまいかと訝まれるほどである。——

又ある所では斯んなことを云つてゐます。

——露西亞人の狂性のうちで一番自分の眼に付いたのは、寛

豁て得意げな率直である。文明の男女ともあらう者が、かくまで明らさまに隠し立なく自分自身を表明することは他の土地では見られない圖だ。彼等はその理想や考を憚りなく口にのぼすばかりでなく、時々自分の經歷まで打敗けて了ふ。それで他人が自分の行爲に就いてどんな考を起さうと不關焉と云ふ風だ。殊に婦人に於て甚だ驚く次第だが、この開放主義の裏には慙う云ふ驕があるのだ。「俺は御覽の通りだ。寛豁な俺の性質では、遠慮深く隠しだてするやうな水臭い氣は出ないと云ふものだ。自分で自分の判断が付かないやうな身の上知らずとは違ふのだ」——それ、この率直の裏には偽善に對する恐れ、惡みがあり、磊落に對する驕がある。……英人の強情、佛人の慎重、獨逸人の傲慢、丁抹人

の馬鹿々々しさには似もつかないで。

露西亞が地球の陸地の六分の一を占めて、黙々として北方の空に横はつてゐることや、世界中に陸續きの領土を之れ程廣く持つてゐる國はどこにも無いと云ふことや、しかも此廣漠の原野は何物にも障られずにさながら大廣間を開け放したやうな寂漠單調であることや、さうしたことは誰も知つてゐることであり、また、この廣漠の原野に生れた人々は又常に隱、險の天候と戦はねばなりません。更に人種の複雑、政治の壓制、信教の不自由、それ等は又險惡の天候のやうに人々の胸に暗雲を漂はせます。けれども人間の胸には、外より壓するものが強ければ強い程、益々それに打ち勝つて最後の自由に到らんとする尊い生命は常にその無



限性を發揮せんとする。彼等はこの尊い生命の聲を内に聽かんが爲めには一切の外的生活を捨て、省みない。この國民ほど爆裂彈を平然として握る國民は他にない。彼等は野の鳥の如く常に自由の空をあこがれる。

獨立自由の生活！何と云ふ尊嚴の聲であらう。しかも南歐の人達が輕燥逸樂の爲めから叫ぶやうなものでなくて、此國の人達は「生きたが爲めである、牢獄の底から叫び出さるゝ血の聲である。一命を捧げても、しかも悔ゆることなき雄々しい信念の叫びである。止むに止まれぬ本願である。」

彼等は此世さながらなる牢獄に居りながら晝も夜も自由の空を忘れることが出来ない。それは眞に得られないものかも知れ

ぬ。得られないと云つて泣くこともある。けれど無限の生命は、「その志願やまされ！」と命ずる。「最後の勝利に向つて不退轉なれ」と云ふ。ああ燃ゆるが如き此志願、しかも何ものにも動ぜぬ此の本願の重々しさよ。ああ幾多の人々が此本願を抱きながら死んで行つたことであらう。「皆さん！どうぞマルセイユの歌を歌つて下さい。」マルセイユの歌の悲しさよ。そのみが彼等の悲痛の死の床を嚴肅ならしめる唯一の韻律である。悲痛の底より浮び上がる白銀の微笑である。彼等は身七重の牢獄内にありながらも牢獄を忘れて此自由の歌を高唱せずにはゐられない。

日は出て、沈む、牢屋は暗し。

明暮牢守は——あゝあはれ——我が窓監視る。

監視らば監視れ、此身は逃げじ。

自由は願へども

あゝあはれ

鐵鎖は解けず。

之れは露西亞ヲルガ河地方の民謡ださうですが、一度文豪ゴリキイの著夜の宿に編入されてから、此沈痛の顫律が非常に露西亞人の間に歌はれるやうになりました。そして此顫律が遠く海を越えて我國の劇場に歌はれました時は、心なき観客まで卒然として襟を正さずにはゐられませんでした。

そこには單に厭世的の氣分と云ふより他の悲痛の志願が響いてゐる。「監視らば監視れ、此身は逃げじ。」飽くまで水火二河の悲痛に面と向つて逃げも隠れもしない壯嚴の魂が輝いてゐるやうに思はれるでは有りませんか。その魂には山のやうに動かぬ落

付が覗はれるでは有りせんか。それはさながら親鸞の地獄一定を思ひ出させるでは有りませんか。

露西亞へ行つて先づ驚くのは、どの町にも、どの町にも皆監獄のあることださうです。ロムヤと云ふ町は二萬五千位の人口しか無いけれど、その監獄には六百人からの囚徒がゐるさうです。

彼等は他の國民のやうにそれ程監獄を恐れてゐないさうです。中には却つて誇としてゐるものさへあるさうです。戯曲や小説などにもよくあらはれてゐますが、眞摯の人間、自信ある行き方をする人間であるならば、必らず一度や二度は監獄へ行かねばならぬやうに思つてゐるものがあります。「彼はまたシベリヤへ送られたさうだ。さうだらうとも。あの男はあまり眞摯なもの。」と

云ふやうな調子が農民生活などを書いてゐるものゝ中には屢々讀むこととありますが、従つて彼等は、他の國民のやうにそれ程入獄することを耻とは思はず、入獄したからとて人間そのものは甚だ尊いものであり、その尊さは少しも疵付けられないと思つてゐます。彼等は何よりも先きに眞實を愛し、獨立自由を愛し、人間生活のうち無上の誇を持つてゐます。

「夜の宿にあらはれる無頼漢のサチンは斯んなことを云つてゐます。」

「氣の弱い奴や……人の汁を吸つて生きてる奴には……嘘が入るんだ。嘘はさういふ奴に勇氣をつけてくれる。マンテルを着せてくれる……だが、自分で自分の支配の出来る奴や……」

人の額の汗をあてにしねえて、獨立の出来る奴には嘘は入らねえ。嘘は奴隸と君主の宗教だ。……眞實は自由な人間の神だとか、又人——間。素敵なもんだ。實に高尚な音がするね。にい——

ん——げん、人間は尊敬すべきものだ。憐れむべきものぢやない。同情などといふもので侮蔑すべきものでない……尊敬すべきものだ。……人間の健康の爲めに祝杯をあげやう。自分が人間だと思ふことは……實に愉快だね。慙うして彼は人生のどん底生活のうちに無上の光榮の隠されてゐることを讚美します。人間の本然生活の上に自然法爾を吸み出して限りない法悦の美酒に酔うてゐます。

私はこんな様々の感じの中からマルセイユの歌を再び思ひ出

します。彼等は胸に銃剣を向けられやうとも、その聲を止めず、死者の棺を取り巻いて自由の歌を歌ふことを忘れなかつた。その聲は沈痛である。壯嚴である。人間眞實の叫びである。ああ、無限を戀ひ慕ふ嚴肅なる人間心よ！

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）

### 劇曲「チンタミニ」の宗教思想

——ギリツシユ・ゴーズより——

序

「チンタミニ」は近代印度の鬼才、ギリツシユ、ゴーズ氏の書いた四幕ものの戯曲であります。ゴーズ氏は印度に於けるシエイクスピアであると言賞稱された人であつて、タゴール氏などと共に近代印度の眼ざめを叫んだ新しい思想界の炬火であります。彼は今より三年前の秋、六十二才を以て此世を去り、百篇に近い戯曲を書き遺してゐるようですが、遺憾ながら私は何も読んでゐません。「チンタミニ」とは此戯曲にあらわれる若き梵の行者ビルワマン

ガルの戀人の名ですけれど、實は最高の神の名であります。そして作者は此一篇の戀愛劇によつて、神をもとめ光りを戀ひ慕ふ若き梵行僧の靈の旅路を書いたものであります。そしてそれが直ちに作者の宗教觀をあらはしたものと見てもよからうと思ひます。

もとより百篇近くもある中から只一篇のみを取りあげて、直ちに作者の全體を伺ふことは出来ずまいけれど、然し私達は少くも作者の心の向き方位は知ることが出来るにちがひないと思ひます。又私が此劇曲を御紹介しやうとする目的は、作者の全體の傾向なり思想なりを伺はうとするのではなく、只此戯曲「チンタミニ」の中にあらはれた宗教思想を伺ふだけで満足するのであります。

す。従つて作者が印度人であらうが、日本人であらうが、天才であらうが、凡人であらうが、そうしたことは何の懸念も入りません。私は只私の旅路に於て、何等か益するものがあればよいのです。

恆河の岸邊、暴風雨の夜、荒れ狂ふ波の音は陰暗なれど却つて一種の沈痛なる靜寂が骨身に泌み渡る。時々電光が閃めく。

若き梵行僧ピルワマンガルは、暴風雨の夜をも厭はず、恆河を泳ぎ越して、愛人なる美姬チンタミニの住家へ忍んで行く。チンタミニは、こんな怖しい暴風雨の夜中に戸じまりの嚴重な彼女の室へ、どうして彼が忍び込んで来たかを驚き且つ怪んだ。殊に其日は彼の父親の葬式のあつた日だから彼女は彼が来るのを豫期し

なかつた。

彼は彼女の窓前に掛けられてゐる太い縄によつて忍び込むことが出来たと云つて、手に灯を持った彼女を連れて出る。けれどそれは縄でなくて黒い大きな蛇であつた。彼は熱情に燃ゆるものの自信と大膽な容子で蛇を見つめながら俺は縄とばかり思つてゐたと云ふ。チンタミニは彼の言葉に驚いて何ですつて？と叫んで引退る。

「なあに、恐れるに及ばん。あれは死んでゐる」

ビルワマンガルは、恐怖を以て慄へてゐる彼女をなだめながら、泌々した調子で、戀うて切なる胸の思ひを物語る。

「戀は盲人だ。ああ、戀は何といふ盲人だらう。お前にはそうは

思はれないか。まあ、思つても御覽。私はあの縄をもつてこの壁を登つたんだ、あの黒い縄の蝨げんが、ともすれば此處に私を殺したかも知れないんだよ。そして明日の朝になつてからお前は此戸口に死んでゐる私を見付けたかも知れないんだよ。こんなに私はお前にこがれてゐるんだ。私を見ておくれ！その美しい大きな瞳で……………

チンタミニは無言のまま、蛇の方へ灯を差し向け、再びビルワマンガルに近付いて「あなたは氣が違つたんぢやありませんか。この夜の暗がりに、雲が矢のやうな雨を投げ下して居る時に、あの漲り流れる河……………寄せては返す狂氣がきのやうな大波……………どうしてあなたには渡ることが出来ました。してまた何と云ふひどい

罪でせう！あなたの父様の葬式の夜に、戀人の寢床を尋ねて來るといふ。あなたは罪が恐ろしうはございませぬか。

「罪だつて？お前のその顔に何の罪があるものか。その唇はキッスをもつて歳月積つた私の罪を拭ひ去つて呉れるにちがひない。……父が何だ。神が何だ。お前のほかに價値の有るものが何がある。」

戀はまことに盲人である。戀する者は一切のものかげに永遠の聲を聴かうとする。個々のものはすべて永遠に溶けて一味の岸へと遙かに流れる。そこには天もなければ地もない。あらゆるものが燦たる姿を現はして永遠の節奏をかなてる。

彼は父親の葬式の式場に於て、僧侶が物悲しい挽歌を歌つてゐ

た時も、その歌を蜜のやうな戀の私語のやうに聴いてゐた。そして僧侶が亡き父の面影を呼び返せと彼に云つた時も煙の靄の中に輝く戀人の面影を見た。焼香の薫りには戀人の呼吸を感じ、亡き父の靈を呼ばんとしても心はひそかにチンタミニよ！と囁いた。斯うして彼はあらゆるものかげにチンタミニに出逢うた。

私の考へるのはたゞお前のことばかり、お前、お前、チンタミニ！。あだかも彼の全身の血潮がチンタミニの胸の中へでも流れ込むがやうに、両手を擴げて彼は彼女の方へ進み、早く家に入つて暑いキッスを得んことを願うけれど、あまりに熾烈な彼の熱情は却つて彼女をして氣味わるくせしめる。彼女は内へ這入ろうとしない。そして水の滴る彼の衣服から死人の臭がするので、チンタミニ

ニは、彼が二時間以上も丸木に縋り付いて漸く泳ぎ越すことが出来たといふ其丸木が見たいと云ふ。そして彼女は再び手に灯を持つて岸をさして進む。

## 二

二人は小さい灯の光をたよりに、隠暗茫漠の恆河の岸邊をさまようて、泳ぎついた場所を探ねる。けれど暴風雨はすべての足跡を洗ひ去つて終つた。

暫くして急に彼女は死人！と叫んだ。灯は腐爛した人の死骸の上に投げ出された。彼女は戦慄して、ビルワ！あなたは屍骸に縋つて居つたのです！と叫ぶ。

「そんなにまで私はお前を戀してゐる。死人でさへ私をお前に

連れてくる。チンタミニ、私はそれ程戀してゐる。お前を戀してゐる！。彼は驚愕せるチンタミニの横顔を覗き見て、その凄惨な美に心を奪はれ、何といふ美しさだろ」と呟く。「總べて私の神々は残らずお前の顔にある。あらゆる私の情念は、あらゆる私の感情は皆なお前の瞳の中にある。お前の瞳は私から私の心を奪ひ去つた。私の富、私の名、私の名譽、私の持つて居るものは残らずお前に與へたのだ。他の人々なら死んだ親を葬ひ悲んで居やうと云ふその時に、私はお前の生きた美を喜んでゐる。美は永遠のものである。チンタミニ、お前は生きるだろ、幾年も、そして私はいつ如何なる時もお前と一緒に居るだろ！」

チンタミニは自分の美は永遠でない、自分の生命は束の間であ



ると云ひ、足もとに横はる死骸を見つめながら「なよ／＼」と波打つ黒髪は残らず白くなりませう、額には皺が寄りませう、戀の征矢射かける弓の形したこの眉も萎<sup>し</sup>垂<sup>た</sup>れ果てるでございませう」と訴へて居るうちに急に悲しい感情に息をつまらせて、死が彼女を連れ去つた後には、彼は必らず他のチンタミニを求め、にちがひないと嘆く。そして「死が何んだ！」と嘲笑する彼に向つて、死を嘲笑していゝ程のことを何を自分達はしてゐるか、火葬の柴<sup>し</sup>堆<sup>たい</sup>に焼け残る程のことをしてゐるか、と彼女も絶望の兩手を高くあげて「私達の生命！何と云ふ空虚のものでせう！」と叫ぶ。そして彼女を抱かんとする彼の手を制して、水泡の如き肉の美を求むることを断念して、永遠のチンタミニなる神の愛を求めよと、ひたすらに彼に

懇願する。

けれど彼はチンタミニを離れて神はない。彼はチンタミニの美容のうへに神を想像することが出来るけれど、チンタミニを離れては、彼には神は一の抽象的の概念に過ぎない。その神は彼を救ふことが出来ない。彼を慰め、彼を悦ばし、彼を充たし、彼を永遠の方へ向けない神は神でない。彼に神様をご覧なさいませ！只神様ばかりを！とチンタミニは云ふけれど、彼はチンタミニの外に何物をも求める必要がない。彼は一目チンタミニを見たその日に階級も信仰も放擲つて惜むことがなかつた。彼は私にお前のある限り、神なんど欲しくない。私の神は皆なお前の顔にある！と叫んで彼女にせまる。チンタミニは男の手から逃れやう

とて、灯を地に投げうつて「只神様ばかりを！」と叫びながら暗黒の中へ逃げ込む。

彼は狂へるものの如くチンタミニを探ね求めるけれど彼の聲は徒らに陰暗な夜の寂漠のうちに消えて仕舞ふ。電光と雷鳴と悲痛の心とは益々彼を不安ならしめる。

「暗い雲は暗い雲の後を追うて居る。ああ何といふ暗さだろう！私には遠い處も、近い處も見ることが出来ない。」

彼は暗黒の底に佇立して、つくづく寂しそうな孤獨の自分の身を眺める。「私のもものと呼ぶべきものは誰も無い。何人が私のもものなんだろう。けれども私はたつた一人なのか。」彼は遂ひに不可思議なる自己の存在に驚き、恐れ、神よ！何處にゐます？と殆ど

夢中になつて、漸く白みかけた東方の大空へ両手をあげる。

斯うして彼は至上無限の神、即ち眞實のチンタミニを探ね求めんとする雄々しい旅人となる。

三

ピルワマンガルは飽く迄チンタミニを探ね出さずにゐられな

い。彼は或る高名の學者を訪ねた。

「お前さんは何がほしいのぢや」

「私は智慧を求めにまゐりました。私はどうあつてもチンタミニを探ね出さねばなりません」

「おう！敬虔の人よ。眞理の探求者よ。私はあなたに永遠の祝福を捧げます」

「いえ、私は光を求めて居る賤しい巡禮でございます」  
斯うして學者とビルワマンガルとの初對面の挨拶が終ると、學者は傍に侍する若い弟子に向つて、ガンヂヌの流れで水浴をしてゐる幾多の隱者の生活を讚美する。此學者の考では、毎日聖い水で身も靈も洗ひ清めてゐる彼等隱者達こそまことに偉大の人である。その人達はすでに情念や戀愛や感情に執する一切のものを夢に縋り付いて居ると同様に思つてゐる。彼等は靈のみが唯一の實在であると悟つて居るから、他の何物をも捨て、省みず、只その短い生存の毎日を眞理の探求に費つてゐる。學者は、斯うした隱者の生活こそまことに祝福されるべきものであるまいかと、その若い弟子に訊く。弟子は、隱者達のその生活に就いて鼓舞さ

れることは事實であるけれど、その生活をして見たいとは思はぬと答へる。そして若々しい瞳を落日の大空に向けて  
「何と美しい落日の様では有りませぬか。斜に射下す日の光は、さながら壯嚴の網をあゝの河の上に織りかけて居るやうでは有りませぬか。あの鳥をご覽なさい……：大空を高く翔けて、各々の巢の方へ歸り行くではございませぬか」  
と口走りながらビルワマンガルを振りかへつて、鳥の生活が眞實の生存の相を示してゐるとは思はないか、鳥のやうな生活をしたいととは思はないかと訊く。  
ビルワマンガルは、梵行僧の常としていつも學者が讚美するやうな隱者達の生活をしてゐるけれど、その生活は他から見ても

清らかそらに尊いやうに思はれても實際は只空虚の形式生活にさへ過ぎないと云ふことを充分に知り過ぎて居るものだから、此若い弟子の言葉にこそ共鳴はすれ、年老れる學者の說法には些かも感じない。學者は之等二人の若いものを戒めて、あゝ、可憐かわいそうな者ぢや、お前達はこの亡び失せる生存よりも、もつと心を惹く高い魔力のあることを知らないか」と云ふ。そして昔先生から習つたことのある物語を語り出す。

昔ある正しい人があつた。その人の生活は清らかにして一點の罪や穢れが無かつた。彼は智慧が高いといふ點に於て近在に隠れも無かつた。

或る死の神が彼の許へやつて来て、彼を誘ひ出して或る聖者を

訪ねた。彼等が訪ねた聖者は長い白髪を背後に垂れたまゝ、佇立して靜かに太陽を見つめて居つた。彼の足許には時の經たつうち、に彼が落したと思はれる白髪が山なすごとく積もつてゐた。彼は死の神に向つて「なぜお前はこゝに來たのだ。お前の來る時は未だ來ないのだ」と云つた。そして死の神が何時その時が來るだらうと訊いた時に「まだずつと後のことだ。俺が最後の髪の毛を落す時、それがお前の來る相圖になるのだ。俺は十年毎に一本づゝの毛を落すのだ。そしてまだ僅か數百萬そこゝの毛を落したにすぎない。だから何卒俺の邪魔をしないでやうにして呉れ。俺は解脱を得る爲めに此短い時を費はねばならぬ」と答へた。

死の神は更に一つの問を發した。「人の世に一番不思議なもの

は何んであらう。聖者は答へた。「日日毎日、數限りない人が死んで居る。それなのに生きてゐる人々は満足し、而して恰かも自分達は決して死なないものゝやうに愉快がつてゐることだ。」

學者はこの物語りを終つてから、若い方よと云つた此話は私達の無知なことを示してゐるではないか。……チンタミニに就ての私の知識はこの晩の時間のやうものだ。此處は光明、彼處は暗黒。此處は日、彼處は夜。恐らく總てのものは一場の夢であるだらう。

ビルワマンガルは失望と侮蔑の調子で云ふ。

「あなたのお話はチンタミニのことは何にも私に教へません。あなたにはそれがお解りにならないのですか。チンタミニは確

かに見ることが出来ず、若し見るといふことがさう容易云つてもいゝものならば。」

若い弟子はビルワマンガルの話を聞いて尊敬の念を起して質問する。「でもあなたは、神様は短い時間に知ることが出来ぬと心に思つてゐるでなさるだらう、神様は全宇宙でゐらせられるから。けれどビルワマンガルの答へないうちに學者は神は知ることが出来ない」と斷言する。ビルワマンガルはそれは言葉です。言葉ですと口を早めて學者の考を否定し、神は大愛である」と答へる。斯うして三人の問答の進み行くにつれ、太陽はいつしか落ちて寂漠の夕靄の中から鐘の音が禮拜の時を知らせる。學者は弟子を連れて去る。そして二人の影が消え失せるまで一心に見送つ

て居たビルワマンガルは、「お前方やくざものにどうしてチンタミニが解るものか。俺は知つてゐる。俺は一度チンタミニを自分のものとして居つたのだ」と呟く。そこへチンタミニによく似た婦人が入つて来て第一の家の方へ行く。彼は胸を轟かして其跡を追ふ。

## 四

おごそかな銅羅の音は、祈念を凝す隠者達の魂を溶し込んで夕暗の中から聞えてくる。空には永い間忘れられてあつたやうな新月が、その角をほのかなる黄色に染めてあらわれる。市街は静寂なれど何となく荒涼に見える。

ビルワマンガルをして永遠の神の愛に眼ざめしめんとして心

痛くも戀を捨てたチンタミニは、修道生活の上に安住の天地を見出さんとして、一切の富を捨て、貧しい憐れな乞食共と共に流浪生活を始めて居つたが、涙は更にかわくひまなく、ひたすら神の救ひを念じて居る。銅羅の音は更に物悲しく鳴り響く。「あゝ、神様いつまで私達は悔恨ねばならぬので御座いませう。嘆くまじと思へども涙も胸はいつしか悲しみにひたされる。友達の婦人達は、チンタミニさん！そんなに悲しむものではありません。あなたはまだ苦しみの味を御存じないのです。あなたは曾ては富をもち、戀をもつてお出でなされました。けれど貧乏に生れた子供達には母親のなさけすら否まれて居るでは御座いませんか」と云つて、チンタミニの胸を慰めやうとするけれど、チンタミニは如

何に貧しい生活を營んでも、子を持つ母親の身はどれ程幸福かは知れないと思つてゐる。「私達の仲には一人の子供も生れなかつた。チンタミニは悲惨な戀の終りを悲しむ。」  
盲目の婦人は云ふ。「チンタミニさん。あなたは私がどうして盲目になつたか御存じ有りませんか、それは夏の最中で御座いました。もう三十年も前のこと……私もその頃は大層若う御座いました……私はベナレスに行く途すがらバヤラの町を通りました。バヤラの旅の宿で、一夜、暗い天井を見つめながら寢て居ましたら、何か私の眼の中へ落ちたのです。」心弱いチンタミニはもはやその後を聞くことが出来ない。「おう、もう話してはいけません。いつも災難はどんな人にも落ちて来る。不幸のない

生活の有らう筈が御座いませぬ。」チンタミニの胸は却つて寂しく悲しくなる。人の世の各々の運命ほど解らぬものはない。不幸は何時どんな處から落ちてくるか解らない。人はそれを知ることが出来ない。人は只待つてゐるより外にない。その悲しい運命から逃れることは何人もゆるされてゐない。あの釋尊すらその運命から逃れることが出来なかつた。釋尊は到底駄目だと云つた。そしてその運命に順應することによつて安住した。恰度、水の流りに添うて共に流れ行くものゝ安住である。  
銅羅は再び鳴り渡る。灯は家々の軒毎に掲げられた。「參りませう……鐘が鳴つて居るとチンタミニは云うて甲斐ない涙を拭うて立ちかゝる。けれど盲目の婦人は併し誰がこの暗黒くらがひに私

の手を曳いてくれるのぢや」と訴へる。あはれ永遠に閉ぢて開かぬ悲しき眼よ！

恰度運よくも入口の壁の處に誰のゝやら解らぬけれど杖が立て掛けてあつた。それを見出した婦人は、斯うして注文通りに杖のあつたことを不思議に思ひながらいつも神様のお恵はありがたいと感謝する。「お前さん、あの杖について私達の後からついて来ることは出来ませんか。」「え、出来ますか。あ、鐘が鳴つて居る。」今は大變に、大變に暗うございますか。あ、鐘が鳴つて居る。」他の婦人はその杖を盲人に渡そうとして手に取り、文字の彫り付けられてゐるのに氣付いて熱く視れば、それはチンタミニと云ふ文字である。

「おう、チンタミニ！この杖にあなたの名を書いたものは誰でせう。之は隱者の杖に相違ありません。その人は之に神様の名を書いたので御座いませう。なぜなればそれは隱者のたつた一つの支柱ですもの。私達はどこに行つてもあなたのお名に出逢ひます。どんなに親切でせう神様は………神様は私達と一緒に居て下さるのです。」

チンタミニはその杖を見て、ビルワマンガルが此家の奥に居ることを知り、轟く胸を押し沈めて、早く此家の前を去ろうとする。銅羅は又嚴肅に鳴り渡る。

盲人は立ち上つて、ああ、鳴つてゐる、あれが最後の鐘だらうかと呟きながら、お友達の背後からついて行く。



## 五

ビルワマンガルはこの家の奥の一間に、此家の主人と、聖地ジャ  
ゲルノウトへ巡禮した日の物語りを話して居つた。そして彼が  
夢寤の間も忘れることの出来ない戀しいチンタミニが、乞食共の  
群に入つて此家の門口に休んで居ることを知らなかつた。

此家の主人は土地の風習として、此梵行僧を神の如く尊敬し、望  
むがまゝに如何なるものでも布施しやうと云つた。話が進むに  
つれて夜もだん／＼更けてくる。そして眠りに就く頃となつた  
ので、主人の妻は賓客の寢床を用意しつゝあつた。

「私はもう寝なければならぬわえ」

「では御案内申します。何か外に御望は？何事でもお望みのま

までございます」

「では貴方の妻を今夜私の許に御望申します」

主人は驚いて、それは冗談であろうと云ふけれど、ビルワマンガ  
ルが承知しないので、もし彼女が承知しますならと云つて室を出  
て行く。

ビルワマンガルは獨り室の中で嘲笑した。「あの眼の見えぬ馬  
鹿者奴が！私は聖者では有りやしないのだ。世の中に一人だつ  
て聖者が有るものか。そして主人の妻の美貌を思ひ浮べて、あの  
女は何と云ふ美しい眼を持つて居るんだらう！あんなに大きく、  
あんなに暗く……丁度一番暗い夜のやうにと恍惚とする。

けれど、ふとチンタミニのことを思ひ出して、生死さへも解らぬ

彼女の行衛を悲しみ嘆いてゐるうちに茫として彼女の瞳が暗の底に光つて居るやうに思はれる。その瞳の光は絶へず彼を探してゐるやうでもある。思はず知らず彼はチンタミニよ！と叫ぶ。銅羅が鳴り渡る。その物悲しい嚴肅さは彼の心を散々に絞り上げるやうである。彼はチンタミニよりも他の女に一寸でも心をひかれた自分のあさましさを思うて身震ひした。チンタミニよ！私は罪を犯した、お前に對して罪を犯した。何處にお前は居る。チンタミニ、許してくれと身をもがいてゐるうちに、戸は靜かに叩かれ、主人の妻が這入つて來た。彼女は身をまかしてまで、此聖者の心に叶はうと、深い決心をして來た。彼は眼が眩やむやうであつた。そして絞るやうな聲で編み針

を持つて來てくれと頼んだ。彼女は彼の云ふがままに出て行つて、編み針を持つてくる。彼は遂ひにその編針を以て、彼の眼に突き込む。血は兩眼より走り出る。

彼は號泣する彼女に向つて……泣いてはいけませぬ。どうぞ喜びの涙を流して下さい。あなたは人生の一番大きい恵みを私に下さつた。貴女の編針……あれが私の救主だ。どうぞゆるして下さい。之から私は、戸から戸へ漂浪ひ歩いて、その日／＼の糧を乞ひ求めます。私の足は潰れるて御座いませう。そして私の盲ひた眼は天を仰ぎ光明に憬れてチンタミニに叫びます。あなたよ。どうぞ泣いて下さるな。あなたの眼は私のやうな罪

人に涙を流してはなりませぬ。喜びの涙を流して下さいませ。あなたは私を救つて下さつたのだ、どうぞあなたの眼を徳と愛の曇りない一つの鏡として下さいませ」と語る。

彼は懺愧の涙にかきくれないながら、再び此家の主人に罪を謝し、「さあ、私を市街に出してくれ。其處に私はチンタミニに行く道を見付けるよ」と云ひつつ、よろめきながら静かに出て行く。

## 六

場面は市街、時は午後。チンタミニは盲人や、跛者や小兒達の間さまじつて、食物を頒け與へて居る。飢饉が到る處にはびこつて悲惨を極めてゐる。わけても乞食や巡禮者は幾日も／＼食にありつくことが出来ない。

三人の隠者が来る。彼等は、この痛しい飢饉によつて人々が惱まねばならぬことが、どうした運命であらうと語り合ふ。或る者は、これは過去に犯した罪の酬ひであらうと云ふ。定めて前の世で乞食に少しの喜捨も呉れず、無宿者に一夜の宿も貸さないと云ふやうな積り積つた悪事の數々が今になつて酬ひて來たのだからと云へば、他の男は、それにしてもなぜ皆なが一時に斯うして苦しむのだらうと怪しむ。

隠者達がこんな話をしてゐるうちに、幾日も食べずにゐる乞食の盲人は、杖で大地を打ちながら「あゝ神様、あゝ、なぜ私はこんな生存をさせられるのでございます」と嘆く。

隠者達は更に話を續ける。

「けれど生長と死滅とは人生の二つの法則ぢや。私達は誕生から死滅まで旅をする、最後に何か私達を待つて居るかも知らない！」

「苦痛と無智とは人生の木が生ひ育つ土地なのぢや。運命は丁度いゝ時にそれを伐る斧だわい」

「創造や、保存や、破壊は生存の永久の法則でございます」

そこへビルワマンガルが、杖に倚り、道を探りつゝ入り来る。「日は暮れた、真に暗い、一刻一刻と、だん／＼暗く暗く、そして物さびしくなつて来る。盲人には日と云ふものがない。チンタミニ！」と獨りごとを云ひながら此連中の方へ近付いて、乞食の子供の「お母さん」と云ふ聲を聞くや否や、彼は遠い過去に死んで行つた自分の

母親のことを思ひ出す。

「お母さん！何といふなつかしさだらう！」

彼はそのなつかしい母親の手を取つてガンヂス河の岸邊へ行つたことを思ひ出す。……二人はその岸邊に立つて靜かに昇る旭日を凝つと見た。金色の日は聖い水の清い沐浴ゆあみから昇つて來た。そして高くへ、高くへ、と靜かに空へ昇つて行つた。その時の喜びは云うに云はれぬものであつた。……あゝけれどそれは今となつてはすべて悲しい思ひ出である。彼の母は此世にゐない。彼の眼は何物も見ることが出來ない。彼は只チンタミニに逢ふといふ一つの希望につながれて、一日一日を送つてゐるのだ。彼は日に／＼弱くほそつて行く。その足は漸く彼の身

體を支へて居るまでだ。彼は見出すであらうか？此世に生きてゐる間に眞のチンタミニを見出すであらうか？チンタミニよ！どんなに長い暗い年月が此無益な探索に費されたことだらう。あゝ、私の眼、あゝ、私の眼。此眼はお前に對して罪を犯した」

彼は込みあぐる悲哀の額を自分の手で叩きながら「チンタミニよ！みんな運命ぢや！お前は天上から見ることが出来ないか。私は罪を犯した。けれど私は無智だつた。かやうな罪には何の赦もないものか。おう、チンタミニ、私に來い、私の嚮導をしてくれよ」と、さながら狂者のごとく叫ぶ。

チンタミニは眼の前にある。けれど盲目の悲しさに知ることが出来ない。チンタミニはそれがビルワマンガルであることは

知つてゐるけれど、わざと身を制せんとして苦悶する。

彼は尙も叫ぶ。

「私は神が欲しいのぢや、あの支配者の、至高いとたかいチンタミニが欲しいのぢや。彼はどこにゐますやら。私を彼に導く光は何處にある。」

月光は彼のやせこけた頬に流れる。彼暫く沈黙。やがて戦慄しながら冷たい光の方に進んで行く。他の人々も彼の後に從つて動いて行く。

七

層また層と高まり行く巨岩を背景として中央に洞窟が見える。洞窟よりは光り指し來り、悲しき樂の調べ嫋々として響き來る。

東方の空よりは曙光の如き閃光輝く。

ビルワマンガルは左方より摸索しつつ岩道へさしかゝる。夜明けのそよ風はかしこに、ここに、和かに吹く。彼は遂ひに洞窟に達す。洞窟の中はほの暗けれど、かすかに白衣の人の幻影見らる。その顔は見わくるに由なけれど、白色の髪はふさ／＼として胸に垂る。ビルワマンガルの摸索の手が幻影の白衣に觸れし時、光消え失す。彼等二人、靜かに明け行く曉の光の中に影の如く見ゆ。ビルワマンガルは歡喜極りなく、ああと叫ぶ。幻影は、ビルワマンガルの額に觸りながら、未知のものに逢ふとも、爾（チンタミニ）の心恐るること勿れ……爾は今何を見るかと云ふ。

一人を見ます。彼は海原を歩いてゐる

海原は二つに分れ

ます。彼は二つの大洋の間を歩いてゐます。多くの人々が彼に従つてゐます。

幻影は更に彼の胸に觸つて、爾は今何を見るかと云ふ。

一人の子供を見ます。その兒は大人となつて參ります。彼は泣いてゐる。泣くな！泣くな！あの人々は誰てございます。あの人々は彼を答つて居ます。

幻影は手をビルワマンガルの頭に置き、又爾は今何を見るかと云へば、ビルワマンガルは靜かに殆んど精神昏曠のうちに在りて一人の王子が見えます。時は夜、一人の婦人と子供とが眠つて居ます。王子は此二人を残し置いて、ヒマラヤの峯を登つてゐます。彼は一番高い峯に登つてまゐります。……ああ、閉ぢて

はならない！開け！戸を開け！私を案内してくれ。今こそ私はあなたを見る！あなたは愛を以て憎悪を癒す人の子でございませ！私はあなたを知つてゐます。人の子だ！あなたは涅槃の門を開けながら、高いヒマラヤの頂を踏みなさいませ！

幻影は最後にビルワマンガルの眼に觸れると、其瞬間に四邊は光明に輝き、洞窟と幻影は消え失せる。ビルワマンガルは私は眼が見える！眼が見える！と、喜悅と感謝のあまり手をさし上ぐ。

チンタミニは乞食達を引き連れてこゝへ来る。そしてビルワマンガルと互に相見て靜に沈黙する。彼等二人の間には只靈感が流れ通うのみである。やがてチンタミニは彼の前に跪いて、神々しきお方さま。どうぞ、あなたの慈悲の眼眸を私共の上に垂れ

下さいませ。光明に入る道を私共にお垂示して下さいませと願ふ。

「来てごらん！あれが光明なのだ！光明なのだ！」

ビルワマンガルは手をあげて彼等を祝福しました。そして此

劇曲は光明の輝きの中に靜かに最後の幕を下します。

チンタミニの宗教思想

### メーテルリンクの運命觀

メーテルリンクのものを讀むと、いつもながら人間の深い運命が彫り付けられてゐるのに氣が付きませす。但し彼の感じさせる運命は、ギリシヤ人などが考へたやうな、魔神の與へる運命ではなしに、實に吾々人間の心の奥にひそむ運命であります。即ち佛敎で云ふ宿業とか業報とか云ふのが恰度メーテルリンクの感じさせる運命であるやうに思はれます。

メーテルリンクは運命觀に就いて二種類あると云つてゐます。一は受動的の運命觀、他は發動的の運命觀であります。受動的の運命觀と云ふのは、古來ギリシヤ人などの考へたもので、自己以外

に超人的のもの、即ち魔神のやうなものがあつて、そのものが人類の運命をさめるやうに思ふのです。その神は甚だ慘忍なもので、若し誰でもその神の怒りに觸れやうものなら、直ちに亡ぼされて仕舞ふのです。そして彼等は到底此神に打ち勝つことが出来な  
いと思つてゐるから、どれ程この魔神が慘逆でも、彼等はひたすらその慾望を満足せしめんとして唯々としてゐる。彼等はそれが爲めに如何なる犠牲をも、もののかずとしなかつたのです。然し斯うした考は、ギリシヤばかりではなしに、どの國の物語にもあらわれて居ります。又廣く考へれば、私達の棲んでゐる現代に於てさへ尚ほ方位方角とか、厄年厄日とかを氣にして神官や僧侶から運命の魔神に祈禱を捧げて貰ふのを聞いてゐます。それは姿形



こそ異なれ、運命を司る不可思議の神の靈を想像し、その神の怒りに觸れんことを畏れて、祈願を捧げる點に於ては、昔も今も、ギリシヤもその他の國々も同一であり、もとより彼等は犠牲にすべく、昔の人の如く娘の生命を捧げたり、人の生血を捧げたりはしなくとも、尊き財寶の一部分を捧げて懇願するではありませんか。日照りが續けば雨を乞ひ、雨が續けば雨の晴れんことを乞ひ、不幸や病氣の爲めに祈禱を捧げることは總べて運命の神を想像するからであります。

けれど近世の科學によつて養はれた人々、絶對の神を認める人々は、斯うした迷誤から救はれて居ります。そして口々に「舊習は斃れた神々は死んだ」と叫び、何ものによつても穢されたり、お

びやかされたりしない尊い人間を發見したことを誇つてゐますが、それと共に近代人は、古代人の考へ及ばなかつた神秘の運命を發見し、自覺するに至りました。それは自己の内部に棲む發動的の運命であります。即ち佛教で云ふ業報であり、特にメーテルリンクの主張する近代人の運命観であります。

メーテルリンクは、その運命観を説明するに當つて、スコットランドの農夫達の間に使はれてゐる *Fey* と云ふ言葉を借りて來て、面白く説いてゐます。フエーとは悲運を持つた者と云ふ意味なそうですが、スコットランドの農夫は、如何に努力しても、如何に助力や忠告やを受けてもある抗し難い衝動に驅り立てられて、避け難い大破裂の方へ強いて向けられる心の状態を持つた人にはフ

エーと云ふ名を與へるそうです。然しその悲運は、受動的な不幸ではなくて、防げば防がれもしたやうな發動的な不幸を意味するそうです。即ち吾々の愛慕する人の死の如きは受動的な不幸を意味するそうです。即ち吾々の愛慕する人の死の如きは受動的な不幸であつて、防がうとして防ぐことの出来ないものであるが、それとは違つて、豫兆を受けながら、然もやつていけないと努力してゐながら、遂に抗し難い不可思議の衝動に驅られて、悲惨の方向に足をまげるやうになる人を、フェーと稱するものなそうです。例へば私達の過去を顧みて、右へ踏み出そうか、左へ踏み出そうかと考へた場合が、誰にだつて澤山あつたにちがひありませんが、その場合に、左へ踏み出すならば危険があるやうに自分にも思は

れ、又往々にして他の人まで、そのやうに忠告したに係らず、なにか解らない或る神秘的な衝動力に驅り出されて遂ひに永久に取り返へしのつかぬ深淵に陥ち入ることがあります。人は此處に悲惨なる涙に待ち伏せされて後悔します。けれどその當時踏み出した一歩は永久取り返へすことが出来ません。

若しその當時左へ踏み出そうとした足を右へ踏み入れたならば斯んな悲惨は無かつたろうと思ふにちがひない。實際、その當時は左へ踏み出そうが、右へ踏み出そうが自分の自由であつたのです。然かも、左へ踏み出してはいけなと云ふ警告さへも受けて居つたのです。こんな場合に起る運命感、友人が死ぬと云ふやうな、自分に取つてどうすることも出来ない受動的なもので有

りません。即ち自分以外にゐる運命の魔神によつて支配されるやうなものでは有りません。ですから其人は「自分は良いのであるけれども、他の者によつて斯く悲惨にさせられた」とか、「運命の魔神が斯んな悲惨の淵へ自分を突き落した」とか云つて、他に罪を塗り付けることが出来ません。茲に於て自分達は、天を恨むことも出来ず、他人を呪ふわけにも行かず、ひたすら自分自身の内に宿る不可思議の宿命に泣かねばなりません。自分で自由に撰擇して、そして陥ち入る悲惨であります。それは所謂「自分で穴を掘つて自分で這入る」のではあるが、然し、それは掘るまいとしても掘らずにゐられないのです。そこに人間の悲しい宿命が感じられるでは有りませんか。又私達の意志によつて、どうするこ

とも出来ないものが、内に深く藏有されてゐることに氣付かれるては有りませんか。茲に於て、もはや意志の自由などは問題になりません。私達の意志することの出来る天地は只表面にあらわれた所ばかりで、その根は深く渾沌無窮に下されてゐることに氣付かれます。そして自己の根元の遙かなこと、神秘なことに驚かされます。

茲にメーテルリンクの運命觀神秘觀が力説せられるのであつて、それはギリシヤ人の考へた運命觀や、神怪不思議な神秘觀とは遙かに異つてゐるのであります。

私達が若し私達を省察するならば、誰しも自分の心の起滅さへも如何ともすることが出来ないことに氣づくてせう。そして私

達の日常生活の一步々々に、常に不可抗力の潜在することを知り、その業報から逃れることの出来ないことを知るにちがひありません。茲に於て、眼ざめた人は、自分の現在の生活こそ、暗い暗い地獄の上に築かれた生活であることを知つてゐます。

私達は常に「解る」と云ふ言葉を使つてゐる、けれど私自身の念々刻々の歩みさへ解らぬものが一體何を解つたと稱するのである。解つてゐるやうに思つてゐることが、却つて悲惨ではありませんか。メーテルリンクは戯曲「室内」に於て、解つたと稱するものゝ悲惨の面影を私達の前にさらけ出してゐます。室内の人も、室外の人も、見る人も、見られる人も、共に自分の運命が解らぬのでは無いかと。私達は笑つたり悲んだりする。けれど私達の笑

つてゐることは、真に笑ふに足ることであらうか、悲しむべきことを悲しんでゐるのであるうか。ともかく「室内」を讀んでゐますと、斯うした深い疑問の聲が、さながら大野原に草刈る響きを聴くがやうに、眼に見えないものゝ響きがサクツサクツと響いてくるやうに思はれます。然かもその響きが神怪不可思議な神秘ではなしに、常識を以て十分に理解することの出来る神秘であります。そして此神秘こそ、却つて非常識に空想する神秘よりも一層確かの一層怖しい響を私達に感じさせるてはありませんか。それは私達の日常生活の個々の端々にまで深く喰ひ入つてゐる神秘で、そして私達が常に忘れて氣にも止めずにゐる怖しさではありませんか。私達は日々此怖しさの上を一步々々渡つてゐる。

そしてその一歩々々は永久に取り返へしのつかぬ重大事件である。若し私達が自己に徹せんとするならば、必らず此嚴肅かぎりなき自己の日常の生活に、先づ眼ざめねばならぬこととせう。

眞に自己に眼ざめた人は、自分から自分の運命を切り離そうとはいたしません。彼は切り離そうとしても、到底切り離すことの出来ないことを自覺いたします。彼はむしろ、永い間戦うて来たその手を垂れて、運命の導くがまゝに従ひます。そして此服従の瞬間、彼は豫想外にも却つて運命に對して感謝を感じます。なぜなれば運命は永い間自分の怖れて居つたものとは遙かに異つてゐるからであります。残忍の假面は運命の姿ではない。運命は只光明の使であることを知ります。彼は此天使によつて却つて

祝福され、限りなき幸恵を與へられます。之れはまことに心靈の神秘であります。

暗路を辿つて光に逢ひ、悲痛に沈んで微笑を見出すことは、その境に眼ざめた人から見れば、むしろ驚くにたらないことであります。そして自己の宿業にさしまかせることは、決して苦痛や服従ではなしに、むしろ此服従によつてのみ喜悅を感じうるのであります。

その人はまた斯う感じます。自分の限りなき宿業のうち、大宇宙の脈搏の響が通ふことを。そして、始め彼一個の運命のやうに思つて居たけれど、實はそうでなくて、それが大宇宙の運命であることを感じます。それで彼は「宿業にさしまかせ」ながらも、永

劫の流れにまかせて流れ行く平穩と感謝とを感じます。そのものは決して不安を感じません。それは恰も戯曲「室内」中の幼児の如く、人々と共に悲慘の家に住みながらも、やすらかに眠り、安らかに微笑を續けます。彼はすでに不死の世界、大きな現實界の子であるからであります。

實際聖徒達の生活が、私達の生活より優れてゐるとしたならば、それは日常生活のあらゆる端々に藏された自己の深い運命を知るからであります。生活が深くなればなる程、一切の事物が自分から離れたものでないことを知ると共に、むしろその一切の事實こそ自分の尊い肖像であることに氣付きます。かくて國土草木の一切まで、自己の寶藏であることを知る人にとつては、一つとし

て捨てゝよいものが無くなるにちがひありません。その人の道は無窮のかなたにまで手をのべてゐるにちがひありません。

けれど聖徒達は斯う感じます。自分が空を眺めるのではない、空が自分を眺めてゐると。恰度ある讀書愛好家が告げるやうに書籍を自分が好むのではなくて、書籍が自分を好むのであると。又好酒家は告げて曰く、始め私が酒を飲んだ、けれど今では酒が私を飲んでゐると。聖徒達は自分の眠つてゐるひまも、空は眠らずに自分を守つてゐると告げるてはありませんか。彼等は待たるゝ子、求めらるゝ子と云ふ尊い自覺に愉悅いたします。なぜなれば彼は一切の上に自分の故郷を見出すからであります。

かの親鸞は、兎の毛、羊の毛のさきにある埃にさへ自分の深い宿

業を見たてはありませんか。彼は「さるべき業縁のもよおせば  
いかなるふるまひもすべし」と云ひ、「さればとて、身にそなへざら  
ん悪業は、よもつくられさふらはじ」と云ひ、「されば、よきことも、あ  
しきことも、業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいらす  
ればこそ、他力にてはさふらへ」と告げたては有りませんか。又  
それであればこそ、「煩惱にまなこさへられて、攝取の光明見ざれ  
ども、大悲ものうきことなく、常に我が身をてらすなり」と高唱  
するほど、無限の空が常に眞實の郷土へと彼を導いたのではあり  
ませんか。

天才は自己の運命の聲に導かれて進む、只その聲をたよりに進  
むとブレイクは語ります。それは尤もなことであります。天才

は利便の爲めに動かず、規準の上を歩まない。天才はひたすら耳  
を傾けて無限の聲を聴かんとする。實に、天才は宿命にさしまか  
せて、如何なる海の底へも辿ります。彼等の歩調こそ直ちに自然  
の歩調であります。所謂、一人の歩みにして萬人の歩みでありま  
す。であればこそ、人々は彼等の亂れた歩調を整へる爲めには天  
才の歩調に耳を傾けねばなりません。けれど天才は告げます。  
「おん身達よ、先づ自然に向へよ、そしておん身の歩調を自然の上に  
見出せ」と。誠に天才はその歩みを自然から直接得たからであり  
ます。親鸞はおの／＼のはからひに依らずに、佛天のおんはから  
ひにさしまかせよと告げました。

……斯の如く、私達はもはや自己以外の遠い空に運命を押し上

げて見やうとは致しません。そしてギリシヤ人の考へたやうに運命によつて自己が呪はれてゐるとか、殺されると云ふやうに感じません。却つて私達は自己の圏内に運命のひそむことを知ると共に、益々私達の領土の廣さを感謝せずにはゐられません。そして取り除かうとした一切のものが、むしろ自分達の成長に對して無くてはならぬ糧であることを知りました。

私達は先づ、盡くることなき法藏の大地に、すつくり立つことの出來た今日のよき日を感謝しやうでありませんか。

### 充實せる生活

私達が、かの麗美に書かれた傳説中の神に別れたことは、何よりも先きに喜ばねばならぬことであります。なぜなれば、それは私達の生活を救ふべき眞實の神ではなしに一種の化佛であつたからであります。そして私達が此化佛の囚れから眼ざめた時に、始めて眞實の如來に逢ふことが出來たからであります。私達は今や、如何に憐れむべき生活を讀けてゐるにしても、此生活こそ、私達の神より與へられた缺くることなき領域であることを知りまし



た。私達は此生活の領域を他に於て、求むべき何ものも無いことを知りました。斯くして私達の救済とは、私達の生活を充實せしめることであることを知りました。然らば私達は如何にして私達の生活を充實せしめやうか、それは私達が、一に私達の眞實の神に絶対歸順する生活に生きることによつて始めて獲られることとあります。

## 二

私達は、常により高い生活に對する各自特殊な傾向を求めなくてはなりません、人生に於て之れ以上尊い目的はありません。私達の生活が高められ、深められるのは、私達に與へられたこの無限との交通に依つてのみであります。若し偉人、眞人と稱せられる

人達の生活が、私達の生活よりも卓越する所がありとするならばそれは彼等の生活が、無限との交通が一層確かて一層瀕繁であるからであります。「唯佛を念じて」とか、「天命に従ひて」と云ふ人の生活は、實に私達が見逃がして居る日常生活の瑣末の内にも無限の讃頌を聽き、充實の生活を味得してゐるのであります。彼等の生活の材料は私達の材料と同一であるけれど、彼等によつて産み出される生活は、私達のものとは遙かに異つてゐる、その異なつてゐる點は何處にあるであらうかと云ふに、單に彼等が無限に對して結んでゐる彼等の交通に於てのみであります、自然派の人達は此世から、偉人や眞人を除き去つた。そして總べてを凡人にして仕舞つた。それは尤ものこととあります。なぜなれば、外からば

かり見るならば、總べて同じ人間であつて、何も特殊な光輪を頭に冠つてゐるわけではありません。けれど若し人々に内的生活と云ふものが有るならば、そして一人一人の内に立ち入つて見るならば、私達はかの偉人真人の生活に於てどうして驚嘆せずにはゐられやう。私達はむしろ再び偉人の頭に光冠を冠らすことの至當を思ひ出させられます。その光冠こそは私達の想像することも出来ない無限との交通を示したものでは有りませんか。

永遠の現はれるのは、いつもながら或る瞬間に於て、あります。が、この瞬間から私達の眞の靈的人格が形成されるのであります。私達の眞の生誕は此時から始まりませす。或る人は、一輪の花の奥

にも、永遠の手が伸ばされて居ることを不意に感ずる。或るものは悲しみに泣きくれてゐる間に、「實は自分の戀ひ慕ふものは失はれたのでない、自分は却つて得たのである」と云ふやうに、忽然として感得します。その瞬間彼等の瞳は永遠に行き、彼等の胸は無窮に擴がることを感じます。斯うした生誕は幾度びもあらはれますが、私達は此生誕を重ねる毎に漸々神の方へ近づいて行くことを感じます。然し大抵の人達は、何時神が現はれるかを知つてゐません。そして唯徒らにその偶然を待つことによつて永い日を費してゐます。或る人は、悲慘の事件が起らないうちは駄目である、と云ひます。或る人は放浪でもしなければ……、子でも失つた時で無ければ……、さまざまの事件を並べますが、私達は果し

てそれ程定めのないものを待たねばならぬのでせうか。

若し、「大悲無倦常照我」を信ずることが出来る者ならば、「神は一瞬間たりとも物言ふことを止められない」ことを知るにちがひない。そして少し注意しなへすれば、神が私達のあらゆる行為の端々について、必ず無窮の言葉を話してゐることを聴くにちがひない。私達は私達のどんな生活の斷片をも蔑視してはなりません。これを除いて私達は神に接することが出来ないからであります。この考へが私達の生命に泌み込むことが何よりも大切であります。そして根が生へ、芽が出たならば、やがて花が咲くにちがひありません。その花は、たとへ小さいものであつても、やはり大自然を莊嚴するに無くてはならぬ尊いものであるにち

がひありません。そして、かの路傍の野菊のやうに、大日の照る下に力の限り咲き開かうてはありませんか。これこそ、何ものによつてもおびやかされることのない自尊の生活であり、他を羨む必要のない自悦の生活では有りませんか。かくして私達は、もはや無限を所有すると云ふのみならず、無限に所有せらるゝ光榮を浴びてゐるでは有りませんか、私達は此感謝憧憬の生活を他に、して、充實した生活を考へることが出来ないでは有りませんか。

## 四

世には如何に墮落したと稱せられる人達の中にも、心靈の麗美に感じない人は有りません。唯その人達が聖徒達と異なる所は、心靈の闕からあまりに遠くにゐると云ふだけであります。そ

して彼等は、彼等の生活を何でも無いもののやうに見逃して、聖徒達の生活を天上にてもあるやうに思つてゐるのです。

けれど如何なる聖徒が、自分の生活以外に神に接することが出来たてせう。聖徒は云はなかつたてせうか、「此處が生命の唯一の場所である」と。これ以外の如何なる場所に住むことが出来ませう。たとへ私達は今、小さい部屋しか持つてゐないとしても、私達はそこに神がゐないと思ひうるてせうか。そしてそこに私達が高い生活を求めることが困難であると考へられるてせうか。私達は孤獨であると云ひ、愛しても愛されもしないと云ふ。けれど若し或る深い洞察力をもつて、私達の部屋を見るならば、私達も又、事物の美しさや、心靈の偉大さや、そして生の嚴肅さを見る

ことが出来るにちがひありません。そしてそれは、恰かも私達が直ちに愛し愛されてゐると同じやうに莊嚴麗美を感じさせるにちがひありません。私達も亦、聖徒達のやうに莊嚴な愛の領域に棲んでゐることを知るにちがひありません。ですから、斯うしたことが云はれないてせうか。それは墮落者と稱せられるものに若し何ものかの缺陷がありとするならば、それは天上生活をする機會がないと云ふことではなしに、むしろ自分の生活に對して深い注意と、黙想と、そして恐らく心靈に對する憧憬が足りないことと云ふことでは無いてせうか。彼等の棲んでゐる小さな家、その生活を莊嚴たぐひなき神の懷ろであることを知らないからでは有りませんか。墮落者程、他人の顔色を伺ふものはない。墮落者程、他